（逓信省認可）

掲載要目

懸賞文藝
無言の愛情

文學小言

第八十号

一册五錢
（別製八錢）

明治廿四年
三月六日發兌

和歌五十首

小説花織錦

言文一致論

いらつめ第八十號目次(明治廿四年三月六日)

無名小説(三)……中田一女生
無言の愛情(擬雅文體)
日本音樂史稿(七)……淨瑠子
小説花籠錦(二)……磯部合歡綠女
文學小言
美と醜=鬼成伴=詩、酒、風流
月三十首……琴泳女史
時鳥二十首……千葉埴麿
寄書
三たび湘洋の君へ(言文一致體)……三枝きぬ
通信問答
數十件

いらつめ定價

並製
一部金五錢、府外郵税別に五厘
六部金二十七錢、府外郵税別ゐ三錢
十二部金五拾四錢、府外郵税別に六錢
二十四部金一圓、府外郵税別ゐ十二錢

別製
一部金八錢、府外郵税別に五厘
六部金四十七錢、府外郵税別ゐ三錢
二十四部金一圓八十八錢、府外郵税別に十二錢
(別製は最良の洋紙ゐ印刷し且毎号内外國景色、風俗、花卉、美術、動物、英傑、學者、美人等の寫眞を必らず少くも一葉以上添へ、讀者の娯樂ゐ供します。)

●毎月二回發兌(五日二十日)●府内無郵税●金子御差し送りの手續きは小爲替ならば拂渡郵便局とある處に(神田郵便局)と記し受取人欄内ゐ(神田平永町九番地成美社)と御記入の事●郵券代用は五厘切手で一割増の事●見本は五厘切手で並製五錢五厘別製八錢五厘領收の上差し上げます●廣告料一行八錢割引無し

從第七十八號至第八十二號下部版權所有
明治廿四年三月五日印刷　明治廿四年三月六日出版
發行人　東京○神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　東京市本郷區駒込西片町十番地居住　山本鑑之進
發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

○懸賞文藝新題

○第四十回題(何でもよし)
右　櫻陰天女圖……三月十日〆切
○第四十一回題(何でもよし)
右　愛らしい物四つ……三月廿日〆切
○第四十二回題(唱歌文章)
右　ロ章旗……四月十日〆切
○第四十三回題(何でもよし)
右　花の色……四月廿日〆切
○第四十四回題(唱歌文章)
右　風鈴を買ふ……五月十日〆切
○第四十五回題)唱歌文章)
右　津きぬ……五月廿日〆切

いらつめ第八十号（明治廿四年三月六日）

無名小説

神田一女生

第三回の續き

主「おほゝゝいくらそんなことおッしやッたッて、ちッとも驕りませんよ」。

客「あら譃言だとおもッて。眞實のことですよ。誰にでも聞いて御覧なさいな」。

主「笑談は措いてほんたうに昨年ぎり引いたのは殘念でしたけど頭のわるいので……無理に腦をつかッて居ると今にぼォッとして何にもわからなくなるといふものですから……それに記憶力は鈍くなるし、到底だめだと思ッておもひ切ッたのですけど……行てゐればあなたと一途に來年の夏は卒業するのにとやッぱり未練が殘ッて殘念ですよ……あなたは御丈夫だから結構ねェ」。

客「ぴんぴんしてゐたッて何にも出來なくッて耻しいことよ。才子多病であなたなんざ才子だからですよ……けども妙ねェ肺病とか腦病とか近眼なんていふと男でも女でもよッぽどえらさうに聞えてねェ。私もどれかやッて見たいけど惡らしいほど丈夫よ。これから一生懸命に勉強したら腦病にでもなるかしらん、おほゝゝ」。

主「おほゝゝあなたも眞當に笑談おッしやるのねェ。えらいやうに聞えるか知れませんけど實際そんな病氣になるといやでやでたまりませんよ。お望みなら讓ッて上げたいけどさう自由に行かなくッて困りますねェ。おほゝゝ」。

客「あの例のねェ學校のさ……相變らずあの人ばかりひいきにして憎らしくッてたまらないことよ」。

主「又不平ですか。そんな陰口はおよし遊ばせ。何でも知る人は知るでしやう。あんまりいふとまた女學生は敎師は惡口とひまさへあれば言ッてると雜誌にでも書かれますよ。いふ人の直打がさがりますよ」。

客「あなたはもう學校に關係が無いからそんなこと仰るけど眞當に惡らしくッてよ。だけど眞當に私しは……どういふものか心におもッて居ることを包んで居られないで、つひ口へ出すことよ。だから口へ出すことの外心におもッて居ることは何にも無いの。胸中無一物ですよ」。

このとき主人の少女は起て違棚は寫眞ブックをおろし、

主「ちッとはかはッたのが有りましやう、御覧遊ばせ………まア先きにお旨くは有りませんけど一つめしあがれ」と挾んで出した羊羹

客「ありがたう、私は遠慮といふこと知らないから自由に取ッてよ……其處に置いて頂戴……さうぢやア」。

といひながらつまんで受取るとくしから紙を出してその上に載せ、一切は直ぐに食べ、一寸半紙で指の先を拭き、

客「何れ拜見しましやう」。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

取り上げて膝の上に載せた寫眞ブック、一枚二枚と明け、ふッと目についた寫眞、

客「ありや誰？　さう、大變立派な人ねエ。まアいゝこと何日御寫しなすッたの？　是まで見せて下さらないんだものひどいワ……あなたは實に日本風がよく似合ッてよ。純粋の日本固有の美人だわ。何處丸木……武林……彼處は上手ねエ」。

暫し見とれてゐる。

主「あんまり御覽なさると大事の顔に穴が明きますよはゝ」。

○「おほゝゝ此秀さんも能く寫ッてねエ……何日か秀さんだの明だのなんだのみんな集ッて、一つ撮ッて置きましやうねエ……寫眞は何度見てもあきないことねエ」。

二人は寫眞に余念もない樣子、此時もよく／＼見るに、主人の少女といふも月山靜子、去年の冬弟の馳け込んで來た處。余念もなくして居る靜子の顔よく見るに長面で色はくッきり白く、鼻は高からず低からず、口元の可愛らしさ、目のすこし細きのなれどもはッきりとした二重瞼、殊に秀れたのは濃くも薄くもなく長い眉、毛並よく生へ揃ッて繪に書いたやう、只額の少し狹いのが人相見が見たら能くといふまい。　なれど優等賞はたしかに取れる有物、髮は昨日今日洗ッたやうな束髮、二三本ばらりと額にかゝッた處…實に艶……少し小作りなれどそらりとした姿とは先のほど見たり。　衣服は京お召の中縞に更紗がらの下着を重ね、この頃はやる一樂織に櫻の花染め出した鶯茶の襟を掛け、帶も革色のあらい紋繻子の丸帶、桃色縮緬の帶上げ、金々具ればちん、一体に品のいゝ作り、左の手をついて、手のひらを向ふになした白い處へながめに出てゐる緋縮緬の襦袢の袖かゝッた工合、えもいはれぬ美しさ。　是で鬢ふくらして、高髷にでも結ッたらさぞとれもひやらるゝなり。　客は少女は是亦一個の美人なれど、顔立も丸ぽちやで當世向、眉は地藏眉で、目はぱッちりとして、鼻は高過ぎる位、口も大きい方なれどよッこり笑ふと笑靨が出て、愛くるしいたち、あまり愛敬が有り過ぎて品がないといへばいふものゝ、是は是で一方の大將、とりわけ誰の目にもつくも漆を塗ッたやうに眞黒な艶のある髮の毛、兼好に見せたら喜ぶことならん。　そのうつくしい黒髮は前髮とをしげもなく切ッて、滿足に親が生みつけてくれた毛、わざとちゞらせるとは流行とていへ物好き、富士の額も本意なきおもひ、何といふ結び方にや根をそッと上げて、額端に高く結んだ束髮、見なれねば目あたらしく、可笑いやうにおもへど、見つけると是も是で又品のいゝ一種の束髮、靜子とは異ッて丈夫さうに肉づいた體、縱横釣も合ッて、大きいたち故洋服はよく似合ふ方、常服にはさまで飾りのない淡泊とした更紗地の洋服を着て、少し横なぐりに坐りこんで寫眞を見て居る襟元、色の白さなど雪のやうなり

寫眞ブック抱へてゐる左のくすり指に小さいルビーのはいッた十八金の指輪をはめたり。　寫眞も見盡してブックと閉ぢ、

客「今日ハ秀さんはお留守？　此間宅で秀さんと明と私とでトランプをして、可笑しいことがあッてお腹をよりましたよ」

主「さうでしたッてねェ。　弟が歸ッてから面白さうに話してゐましたよ。　お宅に青山といふ御親類のかたが入らッしやいますか」。

客「叔父の處……えゝ青山敏でしやう。　あれ菊石のあるこはい顔の、私の從兄ですよ」。

主「さうですか。　私はどんな方か知りませんが明さんと御一處に弟が本をさらッて戴きますッてねェ。　ようく御禮仰ッて頂戴な。」

客「あァに御禮なんどに及ぶものですか……あの人は始終こはい顔して居ても談話をすると淡泊な中々深切な人よ。　それは才子だから今に立派になるだらうて皆がいッてゐますよ……今？……今ですか。　文科大學に居ることよ。　此夏は卒業しますッて……年？……廿五か六でしやう……たしか六よ。　お父さんは無くッて、お母さんばかりさ。　そのマザーがえらい人で、財産といッても充分あるのではなし、國で自分が出來る丈の儉約をして、ひまく\には近處の人に裁縫を敎へて、さうして敏さんに學資を送ッてゐるのですとさ。　だから敏さんは何日でも私が一人前になるのは母のお蔭だッて言ッてゐますよ。　それに可笑しいことがあるのよ。　まだ敏さんが國にゐる時分人にそゝのかされて、ある政黨の群に入ッて、血氣にまかせて隨分亂暴なことをしたのですとさ。　そのときお母さんが心配して、いろく\意見しても馬耳東風でちッともきゝめのない處からねお母さんが佛壇の前に坐ッたきり御飯も食べず、時々敏さんが歸ッて來ると一体お前はこれ青山の名跡立派に相續する氣か又ハ潰す氣か、何處までも今までの品行改めなきや手を下さなくッても親を殺すやうなもの、私もおまへの心の改まらないうちハ死ぬまでも食事ハせず、畢竟母の敎育が惡いからと世間の人にいはれるも面目なし。　親が死んでもいゝとおもふなら勝手にしろといッたきり目を眠ッて、二日も食事をしないんですッて。　是にはさすがの敏さんも弱りきッて、段々考へて見ると父には三つの時別れ、母の手一つで育てられた恩、仇おろそかのことでなし、立身出世して、先々安樂に安心させるが子たるの道であッた。　壯士といへバ勇ましいやうにおもひ、人と共に慷慨して、壇上に黄口をたゝいたことなど今更さとッて見ると面白くなく、實にこの時の心持ちは穴にも入りたいやうであッたんですと。　それからすッかり政黨の群を出て、一心不亂に勉強して、とうく\大學に入ッてもう直卒業するまでになつて、身の方向がつくやうになつたもみんな母の恩、あの時母が居なかつたら今頃はどんなになつて居るか知れないと言

ッてですよ」と

主「まアさう。それでよく文學をお修めなそッたのねエ。法律でもなさりさうに思はさるけど……」

客「一体文才があるから……あなた秋色といふ小說御覽なそッて？」

主「えゝ見ました。あれがどうしましたの？」

客「あれは敏さんの書いたのですよ」。

主「だッて武骨散人とあるぢやありませんか」

客「あれもね自分で書いたのでそけどまだ學生ではありするからッて、武骨散人とも朋友だもんですからそれ名を借りたのですけど實際自分で書いたのですよ。中々面白くッてね」。

主「まアさうですか。一体私は今れ小說はあまり好かないで、やッぱり馬琴れ弓張月とか俠客傳のやうなものがすきでそけどあれバかりも實に面白くッて何度讀んだか知れませんよ。あんな薄い小冊子のうちにあれ程も人を感じさせるやうにお書きなすッたのもどんな方かとおもッてゐましたよ」。

客「さう。敏さんにさう言ッたらさぞ喜ぶでしやう。さうく私しやすッかり忘れてゐてよ。此間のダンシングの時ミス筑波がよろしくッて、ちとお出かけなさいましッて」。

主「さうでしたか、相變らず皆さん入らしッて？」

客「えゝく皆熱心ですけど少しは減ッてよ。あなたはちッとも入つしやらなくつて？」

主「別に譯もありませんけど頭が惡いのに跳ねまはつて居るど目がまてつて、仕方がありませんからまア當分も止すつもりですの。今度入らしつたら皆さんによろしく」。

客「かしこまりました。然し此節の舞踏の評判の惡いことは非常ねエ。その所爲かだんく止す人がありますよ。けども交際上必要と見とめてもじめたあとが世評に左右せられて立消えるやうなことがあつては意久地ないと思ひますね。何だか此節も又女子の敎育が女大學風になるぢやありませんか。なぜ日本人は意久地がないのでしやう」。

主「おほゝゝ例のあなたの慷慨說が出ましたねエ。まかし舞踏でもいよく西洋では兎も角日本で行つたは害があると見とめがついたら世評も入れて、廢した方が上策でしやう。萬更それが意久地がないといふこともありますまい」。

客「けども何でもそじめは多少害がありましやうけど次弟々々に害も少なくなり、遂に不都合なことは少しもなく淸潔な男女交際法となるのですわ」。

主「それが口でいふやうになればよう御座んすけれど實際なかく日本人の頭には……心はすつかり掃除してないもんだからまだく塵埃があつて、少しかはつた風でも吹かうものなら外の塵埃と一處になつて舞ひまはるから廣がつて困りますよ」。

第三十七回懸賞文藝應募得點

題　無言の愛情

●唱歌

（イ）　松　乃（イヘシロ）

顔はうす桃髪黒く
猶ゝ愛らし誰の子ぞ。
父のしつゝかわの様子
心の中のなう一男
わなうとましや己ごの心
とは云ひながら係は
親の嚴命是非も無く
心を鬼にふり捨てゝ
榮耀榮華に暮せども
しづごの伏屋も何のその
身には木綿をまとふとも
心の内でもゆれども
一工夫して長屋なる
菓子を餌ゑて知りもせぬ
父の敎へと云ひたりし
今日は雪にも通ふれか、

かぶる帽子の形もよし。
心さゝごのする皮籠の名、
道艸くいぞ一人往く、
何も知らぬかもう見えぞ。
あとてあの子に逢はるべき
目にちらつきて殘るあり。
おひしき夫と一人子と
望まるゝまゝ令夫人、
樂みとては見えばかど、
食に魚なく出るに徒歩
母と呼ばれてあう一男
更に甲斐なき身の宿世。
子供にふのみ送りにし
人より物を貰ふなど
心は中のもかしさよ。
供をもつれずたゞ一人

わらくわぶなころびても
拜みて祈る冥福も
直ぐ起きて往く其影を
窓に吹雪の風寒し。

評　意は面白いでぞ。

（ロ）　相　翠（イヘシロ）

澄み渡りたる琴の音に
清き乙女の優姿
鶯れ如脚もなり。
人目の關の繁ければ
塵には染まず汚れざる
つひ引かされて垣間見し
うたふ歌さへいと妙に
可愛の情は溢るれど
言かはさん術もなし。
あだし心はもたねども。

以上二曲無賞

（ハ）　奥野やす（サカロ）

とざゝぬ御代もしかすがに
まだ言ひよらんすべもなく
色香に匂ふ花の顔
人目の關も越えかねて
袖ふつゝみてくちなしの
哀色をそへて愛らしゝ。

（ニ）　梅月子（フシイ）

すめるまことゝ一滴
矢丸おそれぬますらをの
いたく力ぞこもりける。
愛情みてる涙には
鐵よりかたき腸を

（ホ）　横山ひろ（ヒツカ）

日影のどけき春の野に
うなゐは誰が子名をとへど
目ざしいつくしいとどしゝ。
餘念も無げにすみれつむ
いらへをもせでかへりみる
目ざしいりくしいとをしゝ。

又

打つけに　いひもよらむか　なか〳〵に　いはぬは言ふに
まさるべし。さはさりながら　つゝとなば　などか知るらん
いまはたゞ　りげんと思ふ　己が心、さとりやしけん
何となく　打ゑむかはぞ　見えにける。見るにいやまそ
をしきかな。

（へ）　本吉　みは（ヒダカ）

障子一重へだてつゝ　あけていはれぬむねのうち、
幾夜かさねて螢火の　ひとり我のみ焦すらん。

以上四曲第四等賞

（ト）　露　華　子（センメイ）

ながき契りを二葉より　こえし妹背の初ごゝろ、
咲かぬ蕾れかぐばしく　うちにのみ湧く思ひかな。
逢ひて言はれぬ嬉しさを　つゞる瞳の露のいろ、
そむる紅葉に面はゆて、　ゑづむ姿の床しさは。

（チ）　あ　そ　か（イヘレロ）

色にはそれと見ゆれども　香にはそれと知るれども
愛子に可愛兒と一言れ　洩るゝを聞かんよしもなや。
あゝ我耳人前の世何の報にて　耳なし山のくちなしれ
花とは生れたまひけん　さても拙き果報になあ。
あゝ我民人！

色にはそれと見すれども　香にそれと知らるれども
あゝ懐かしの父上と　一言いはんよしもなや。
あゝ我子等前の世何の報にて　耳なし山の口なしの
花の際には生ひ立ちし　さても拙き果報にな。
あゝ我子等！

以上二曲第三等賞

●文章

白（イ）　奥野やす（サカヒ）

白壁造りの高塀の隅に茂る松の幹（ヌキ）に沿ふて、庭の番といふ見えで立てゐる石燈籠の根、（その根）から庭一面に敷き詰める苔の段通にも寂びた飛石の模樣。底まで見え透いてゐる泉水には緋鯉や錦魚の隊列運動、晝夜と棄てず此泉水に珠を跳らして居る糸の束の樣な瀧、筧から取つてあることを見せぬ爲な態と其處に面白い——虎の嘯く樣な、阿修羅の荒れた樣な一岩で、雲の潜みさうな奥床しい谷と形せり、此谷を覗かせた地衣を纏ふて居る梅の根元から吐き出さしてあるなどは植木屋の奎平が三日寐ずに脳を病ましたやとあつてなか〳〵風流に出來て居ます（した）。泉水の前に數寄を盡して建てられたのは四疊半の茶室、今も親父が逝去ッて、全く無用に屬したので此處を部屋にして毎日學校から戻つて英語を復習するのは此家の息子、まだ歳は十八九で、色の白い眼の涼しい、そして何となく氣韻の高い青年です（した）

容顔につれてか英語を温習する時の優しい聲、それが庭の木立を潜つて高塀越しに隣家の二階まで空氣の浪に打たれて、漂着すると同時に開いた障子、發矢！　目が眩むほど射られました。其障子の間から突然出た令娘の雪の樣な顔を斜に照りつけて夕陽の反射に。見れば令娘も青年と仝し製の本を開いて、青年のリーヂングを聞いて居る樣子です（した）青年が讀を進んで一ページを繰れば令娘も仝しく一ページを繰る按梅では。青年は心の中で「彼の嬢も餘程英語が熱心と見ゐる。妙が僕と仝し志とて。併し何人の令嬢だらう？　此頃隣りへ移つたんだが。まアなんでも好いわ。孰れ我党の君子否淑女だ」。始めの中は唯これだけの冷かな感じでした。が、青年は一日も此温習は怠らず、令娘も亦必ず此を聞くのを忘れなかつたので日が重なるについて、何時か此二人の間に一種の愛情が起りました。で、青年も自然音の抑揚に充分意を留めて、令娘に笑はれない樣にと思ふて勉强すると、令娘も愈々感心して、なんでも青年の讀方に習ひたいものだと益々熱心に聞く樣になつて、今は双方顔を見合す度にて笑顔で挨拶をし、又進んでて互に默禮とする位にまでなつゝ極、遂に青年は痲痺を切らして「ちとお遊びに入らつしやい」と英語で云ひ送ると令嬢は一其意味を解することが出來なかつたものか。聞えなかつたのか。羞らつたのか。何の答へもなく唯顔を赧め、微笑んで、其笑凹から無量の愛敬を送りましる。

評　中程に「空氣の浪云々」は些と仰山でそ。「風に持たれる」位とした方が否味がなりません。

（ロ）　藤元わさ（サカヒ）

忽ちに緩、忽ちに急、斷えんとして續き、續かんとして又斷え、響きの高いものは霜夜の鶴涙に習んで九霄にのぼり、音の低いものは雨夜の蚯鳴とまねて九地にくだり、韻趣横に溢れ、風情斜に生じ、まことに是れ梁の塵も動く程の手技。

「お乳母さん如何もお春嬢て中々お上手ですねェ。あの今彈じて居らつしやるのは何といふ歌ですか」。

「一向妾しや知りませんが何でもお嬢さんが御自分にお作りなすつたものとか……」

「それは屹度面白く出來てゐましやう。一度其歌を見せて下さる樣に頼んで下さいませんか」。

「貴君後程にはお嬢さんが是非お邪魔に來られますから……何處りて此處へでそよ」。

「はゝゝまた弄らうと思りてゐなさるね……」

「今夜とれふ今夜て眞當ですよ。お嬢さんもさう言つてゐらつしやいましたから……決して嘘では有りません……だから其時に貴君其お歌をお尋ねなさい……よほゝまだ嘘のやうに思つてゐなさるの？」

◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎

新月梅花に匂ふ南窓の障子に動く横針の疎影をよそに了然只一人情感を非常点に走らしてゐる若者、折から廊下に音さして此方に來る乳母と春子孃『あら孃さん何ですよ此處まで來ておゐやッて』、襖と北の障子を引き明けて、此若者の前に來ましる。

「おやようれ越しー」

壮者ハ視線を端なく春子孃に灑ぎましる。灑がれた春子孃微笑を含んだ口元の紅を雙の頬に上せて、其まゝ俯向きました。

「とうも余寒は酷う有りますから毎日學校へのお通學も定めておつらいことでしやう……殊に昨日れやうお雪が降りますと……お乳母さんあのお尋ね下さいましたか……何ッてお春孃のお歌と……」

「御自作のお歌……妾持つて居りますよ……孃さん御覧に入れて宜しう御座りますね……」

「とうぞ拜見、おや無言れ愛情！　如何も好い題でそね」。春子孃頭と少しく垂れて讀んでゐる若者の顔を偸むやうに眺めてゐました。　讀み終つて若者、視線の三分を歌—認めた白紙—れ上に灑いで、殘りの七分を春子孃—恥らうて默してゐた—の優しい喋々髷の上にそゝぎ、やがて十分思ひ入つた口調にて

「眞當に無言の愛情ですね」。

妾の家うら（八）　さをとめ（トウケイ）

妾の家うら森一つ越えて前に廣い—妾等子供の目かられ—原が有りまし（ツ）て近所の子供の遊場所となッてゐました。　妾もよく兄と遊びに行ッて、兄が余所の子供と面白さうに遊ぶれを邪魔をして、いぢめられたことや、泣きながら家へ歸ッて母に兄と訴へたこともありました。

（ふしか）明治十三年の春と思ひまそ（ヌキ）いつものやうに多勢の兒供が集まッて、菫々菜、蒲公英、土筆、嫁菜、など摘みくらしたり、かけあるいたりして、『梅ちやをもうそんなお？』『わふまア！　ほゝゝてるちやん夫れはね唯の草ですよ！　やらちがッてましやう！　葉がかうなッてさ』『立花さん君だよこんだは』『さーよろしい』『◯らさんあッち、手れ鳴る方へ……』　互に女は女、男は男と遊んで居ました。　誰やられ春宵一刻價千金といッたと聞きましたが宵でなくとも春げしき程樂しいものとありまそまい。地れ一体に青や黃や紫や赤の花毛氈と布きつめたやうで、空は天の水撒き人足が青インキとこぼして歩行ッたかの樣、時候は長閑で、さうでそまづ丁度よいお湯から出た時のやうな心持でして（ヌキ）見る者で（ヌキ）も聞く者で（ヌキ）も、只々愉快といぬ形容の外へ出ぬ有樣でしる。　元々妾はちひさい時のこと故くはしくと覺えて居ら（ヌキ）ぬによしろ、是丈は間違はないと思ひ（考へ）ます。　妾を可愛がッてくれ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なお雪さんといふのとお美代さんといふのが遠くゝ見えたから（まゝ）獨りはたくと其方へ行きかゝつたときなれく犬の聲と共に皆な逃てしまつて、妾はどうしたらよいかまおくしてゐるうち犬がかけて來ました。　わアくと泣きながら逃げる途端にころんだとき一寸後を見ると犬が傍へ……なゝどんな心持だか分からぬ、起上ッてかけやうとしたけれど（ても）足が前へ（ヌキ）進まぬ、丁度よく兄がかけて來て、妾を抱いて一目散にみんなの跡を追ひました。　兄は其時十でしたけれど（の）小柄の方で、妾はまた春生れの五つで、大方の人には六つの夫れ七つにあッたゝと聞かれる位で、よく二人共ころばなかッたと跡で父や母が笑ひましたが（ヌキ）。　兄の勇氣は中々母の秘藏兒とて日比兄を輕しめて妾には思ひも寄れない程で、またゝく中お家の門の所まで來て妾と下しました。　妾もこゝへ來たから泣き止んで、

「兄ちやんこはかッたねエ」。

兄は息せいく云ッて居ましたが只妾の方を見てにッこりしましたから妾も思はず笑ひました。　兄の此樂しい笑顏は妾の小さな腦にも染み込んで鑄形を十年あまりの今までも殘します此より妾の死ぬまでは忘れない積りです。　今ロンドンにお出でゞすが此話をするとちらくと浮み出ます。　之れが無言の愛情とでもいふのでしやう？

（一）

氷野　秀（オホサカ）

子を持つほど苦勞のものは又とありませんでしやう？　如何な子が出來るかと案せしも長かりしよ、不足なき子と喜んで重荷おろせし心地してはまだ眼は見えぬか、何故語らんか歩まんかと取り越し苦勞も子故でしやう。　日數經るよりすべなきものを……思ふて置かぬが親心です。

「もウし此子は何故でしやう、物いひませぬねエ」。

「物いはんと？　あアまさう早くいへるものか。　生れて何日になると思ふんだ？」

「おはゝゝさうですね……でもいひたいやうでいひませんからつひ案じましてね」。

「案じるアどれどんな顔だ……おゝ嬉しいかよく笑ふよ。そ……それ笑ふさ。　眼を細くして靨まで深うするやうだ。愛嬌たつぷりで惡めない」。

「貴郎この子の樣ですとね賊をでも捕へましやうよ」。

「ちがひないからうゝこくやられると荷造りしても出る事を忘れてしまふだらうよ」。

「貴郎この樣にお語りも出來ないうちは愛情で拵へたやうでそのお語りでもすると幾分か減るでしやうかな？」

「なアに増すッても減りはせんよ。が、無言の時が愛情に富むやうだ……お前でも見合の時は余程愛らしかッたからはゝゝ」

「おはゝゝいやですねエ。　お春！　阿母さんだッてお春

のやうに……おはゝゝ」

評　文が意より劣りました。
以上四章第四等賞

（ホ）　つらき（かすご）

見るから腸まで凍る雪がちら／＼と風の隙間をふくさまゝ、、、、、、、、、、、、、、庭の板塀にすかして、店の久留米がすりもそのまゝで。地面は白粉を篩で卸したやう。そのまア奇麗さ！　主人の命令とは云ひながら掃きけるは無情です。

やゝ惜む氣はあるものゝ遂にそのまゝ無情を仕遂げねばありません。

すでに掃き終ッて、しばし見る内に降る雪としつこくまた積む（もる）。たちまち自分の功を無にする。　庭の枯木は折々は枝から花團を轉ばして、、、、、、、大義にもなる。　いつか愛するよりはいらぶッて、箒を探ッて梢の雪まで搖り落す途端、面と打つ雪に目は盲まされて、激動の瞬時何覺えぬまゝ……はて！　心外な事をしました。氣味わるい手ごたへと共に老樹の梅は枝を、しかも主人が常に尤も賞めて居た枝を……　何の不肖？　何の咎であゝも脆かッた事でしやう？

つまりは身が疎忽れ結果、すぐに詫とは思ひましたが、さて躊躇する氣もありました。　主人は憤りはまたどれだけでしやうか。　およそ知る日頃の氣質、とてもたゞでは措かうやうはない。

今の處考案に私を隔ふよりは吩付けられた事業にいそがしく、小枝から地面は雪まで掃き除けて仕舞ッた頃は雪もやゝ降り靜りました。が、胸にのこるは例の梅の枝の一件です。

つまり一方は生木の一枝、それが爲に何しても人、たましひのある人を！　叱りつけられて—或は打擲するかもしれぬ—何とこゝへたまらふか。おもへば實に塵芥より情けない。けれど即席で料理の仕方はなく、時は用捨なく移ッて行きます。　暇取れば罪を重ねる譯で、遂に思ひ定めて主人の前へしづ／＼と出ました。　叱られることゝ思へば聲さへ碌々は出ず、

「すッ！　すまない事を……私は…いたしました」。

云ッて陰かに主人の顏を見れば、すでに充分怒りの色を含んでゐる（邪推か？）やう。耳をつらぬく霹靂は今か？

ダ、案外！　傍にゐた主人の娘は斯う云ひました。

「おやお前、私の頼んだ事をしてくれたのか」。

云ッて主人へ向ひ、

「庭の梅が余りいゝ枝振りなものですから、一つ生けてお目にかけましやうと思ッて」

またこちらを向いて、

「何？　枝が……いゝよ小さければ他れを添へてもさ」。

同時きらめいたするどい視線、呑み込めどの事でしやう。一應は悟ッて、その梅の枝を娘の手へは渡しましたが、それで何の氣が澄みましやう？

さうなれど却ッて巳れは良心が身を叱責はする……ものゝまかし、こゝ折角令嬢の手柄！ 演劇は破れぬ原因がなりました。

以前からその娘は自分に淺からぬ心を傾けてゐることで、まゞ口からはそれと言ひかけもせぬながら、なゝいつも縫ッてゐるのは自分の爲めの懸衣、つなぐ絹糸は赤縄の祈念でした。「お前は唯なる（の）人であい」とて人目を潜ッて、常の言ひ癖で、今また思ひがけない狂言の仕組、それがどうしてむごらしく破はされましやうか！

彼は身を犠牲よして、嚴父は前を繕ッた。自分も何で巳れの良心のつくろへまい！

不正！ 手持無沙汰！ それながら耐へれば耐へらるゝ人の心は不思儀さ！ 我ながら店まで出た間は夢でゝもなッたでしやうか。 火鉢へもたれてなは物思ひをつゝけてゐる後にそッと跫音。 驚きと共に見かへれば、これ！ 今の令嬢、が、眼尻に見合もした顔に嫣然と笑ひを帶びてゐましゝ。涙を含んで、頬の笑靨も巳なゝいて居ました。

醉香（トウケイ）

（へ）

今日は天麗のに晴れ渡り、日頃肌とさく寒風も姿を隠して、塵埃立たぬ、わけて日曜日なれど今は梅も見頃ならんと三々五々相伴ふて、龜井戸に歩を運ぶ人夥し。其間にまじりて、結城紬の着物高くからげて、絹股引とならはし、茶色の商人帽被りたる人の如し、六才許りある小兒の手を携へて來かゝりしが、

「お父ちやん！ おんぶ……おんぶよ」と歩行を厭ふてか小兒は叫べり。 親は困りたる顔しながら

「坊は強いからなんよをゝしな。 天神樣にはお池があるよ—其内にたんと鯉が—赤いのも黒いのもあるよ。 石の牛もあるし—奇麗な花々も咲いてるよ……」とすかせど頑是なき小供の話よつられて又もちよろ〳〵歩みしが、暫くして、

「おとッちやん！ 天神樣どこ？」

「天神樣はもう直そこだよ……」

この答へにこりてか小供はまたも「おんぶ！ おんぶ！」と叫びて、如何よそかせど聞入れねば、困りはてゝ負へど小さき手を肩にかけ、優しき言葉にてるゝやく其話しに耳傾けながら歩む此人の顔よハ滿心の愛が溢れて、如何にも樂しさうです。

獅虫美雄（トヤこ）

（ト）

「お父さん僕は今日學校で賞典を貰ッたよ」。

「どうして？ 何を？」

「これを！　此間の試驗に優等したもんだから。　其賞典だよ」。

「うゝん立派な書物だな」。

「これハ僕が今度から習ふ高等讀本だ」。

さきほどから洗濯物をふゝんでゐた母親、襖越しに此話をもれ聞いて、洗濯物とほし出し、未だ躾も取らぬ縫ひたての着物を持ッて走ッて來まして、

「これぼん！　それ御褒美！」

着物を持ッゐまゝ小供を抱きしめました。

（十）　　香園女史（イサ）

杉田の梅滿開と聞き、私しもある日曜に出掛けて往きました。　彼方此方と梅林を逍遙してゐる内に後れ方よあまめかしい笑ひ聲、ふと振り返つて見れバ二人の婦人！　が、然し惜しい事にハ近眼の事とて能くハ見えず。　近つくまゝよぷんと香て來るハ是れハ又梅の匂ひとハ一種變ッたーあゝ物思ひの種になる伽羅の香り！　いかある君ぞと顔打ち上げれバこれハ何事？　四十前後の婦人を供に一人の美人、今迄との廣い東京よも見たことのあい、さても天下無類の尤物！　此方でぢッと向ふと見詰めれバ不思議に又向ふも私ゐ秋波と送ッゐ樣、其愛らしい目元にハ千萬無量の情の露が漲ッて居ました。　私しは歩むことさへ暫くは忘れて、優にやさしい高島田ハ後姿を戀しげに（ヌキ）眺めて居たものゝ、さて向ふは遙か先へ往ッた事、どうして此の天晴れの男子がお先／＼跡としたッて行けましやうか。　殘念ながら思ひ切ッて、歩を轉じ、やがてそろ／＼歸途につきました。　けれど其日ハ終よそれぎり美人の顔を拜する事ハ出來ませんでした。

これからといふもれバ只私の眼よハその美人の面影がちらついて居て、寐ても覺めてもたゞ其事ばかり。殆んど私の心ハ美人に取りつかれた樣でした。　休日といへバ何處となく人出の多いところを歩んで、若しや彼の君にハ逢へないかと上野を初め淺草と所々方々を探して見てもあへて一度も其れと思ッた人ハ有りませんでした。　られどされハ勿論の事、美人の家ハ東京かどこの………

＊　＊　＊　＊　＊

用事があッて私しハ靜岡まで往く事とありました。　早朝に家を立ち出で、車よ乘ッて一散に新橋の停車塲へと驅けバ嬉しや發車にもまだ間もあるとの事でした。しばらく待合室に休んで居ると俄かよ二三人の婦人の聲がして、即ち此の室へ入ッて來るを何心あく其れと視線を向けれバあゝ今日はどうした吉日？　思ひに思ッたその杉田で見初めた婦人—即ち私の戀人が此群に交ッて居たとハ！　余りの嬉しさお思はず獨り微笑めバ向ふも何と思ッてか打ちとけゐやうな愛敬笑ひ、同伴の婦人が何か私語くと見る間、はや發車との事に驚んて、あてゝ立ち出れバ、人の多さに恐

れてか戀人の一群は私の入ッた隣りの室へ……あゝ實に浮世はまゝにならぬもの。　同じ汽車—しかも同じ中等室で有りながら……これを見て私、思ひ切ッて、いッそ隣りへ入れかはらうかと思ふ間、はや情ない驛夫は窓の戸を閉ぢて仕舞ひました。　もう此上は仕方がない、と只せめてもと眼鏡の塵を拭ッて窓から隣りを見詰めて居ました。
其中品川沖の見える頃、景色を見やうとてか窓から半面を現はした戀人、思はずも互に顔を見合はせてにッこり。

（り）　堀川由造（イ七）

白布の後鉢卷に振りかゝる大わらはを確かと結びて、鍬形の兜猪首に着なし、あゝ緋威の鎧こそ此武者の專有物の樣に似合ひぬ。　左手に握りたるこそ重藤の弓と覺し。　箙に挿したる十三筋の征矢あゝそれ誰が首をや射ぬかむ。　金裝りの太刀、鎮りの脛當、見るからに意氣凛々としたる若武者、それに其顔！思ひきや元弘の世に亦敦盛ごの姿を見むとは。
見渡す所出陣の門出とおぼし、庭先に居並ぶ雑兵の前には逞しき駒に金履輪の鞍すわりて、研き立てたる轡に紅白の手綱と擧ぎたる今玄關に下り立つ若武者、さてこそ此栗毛の主なるらめ。
何者ぞ武者が後に伏すは？　其長く房々としたる髪にても女性とは一と通り疑ひなるべうもなし。　さては若武者が最愛の妻にてありしか。

流石に生死の程も計られざる軍の首途、やがて凱旋擧げて皈る日を待てとこそ言ふものゝ、心は心の内心の底にこそ若しやこれが……あゝ此世の見納めならんかと思へば矢猛き武夫が心も不知々々天地を忘れ、吾身と忘き、振り返りて妻が脊撫でばやと身を動かせば、亦流石に雑兵の手前も恥しく、ちえッ！　武士！　武士！　人間一度は死ぬべきものぞと殊勝にも心を決しぬ。
決して見れば我乍ら心外！　あゝ未練なりきと悟る矢先、鎧の袖端あく眼に入り、先祖代々の名刀きらくと映つるに奨まされて踏まだも時しもあれ太刀の鞘ゑかと握り止められ茲に心も碎けて脆くも振り向く眼にあゝ亦妻の眼！　滴る涙黒塗の刀鞘を曇らしける。
言ひたき事誰か此首途に無かるべき。　況して武者十八の春、三々九度の盃を重ね、伉麗の契を籠めてより三年、下女下郎が臺所にての取沙汰に雛夫婦とまで言れすれ斯かる嘆きと見ざるべきを……思へば徃先き……あゝ我不幸にも戰塲の露と消え、骨を枯野の月に晒すことありなむ如何に妻が愁傷は……覺束なしこの身の上……あゝ何たる因果ぞ。　只武士とさへ生れずは……一度きざす情の炎に泣き伏す妻を抱き起さんやと思ひしが、喝！　我誤てりさても御運拙なき君の軍、一婦の爲先に顧みずば天下後の世の笑も恐ろし。　況して戰塲に向へばとて昔より末ぶ必定死すべきものと言ひたるを聞か

ず。　君世も用意はよきか、馬牽き來よと言ひ放てば聲の下より駒靜々と近づきぬ。

　妻が止めたる愛惜れ絆、茲に振り拂はれて若武者は早や鞍に跨ればさても心ある人々や。

やがて立ち出づる姿、漸く朝霧に堆れて、聽ゆるは只栗毛の馬が蹄の音。

以上五章第三等賞

（ヌ）　　三坂きぬ（十四）

此頃に無い日和のうらゝかさ。　はゞ笑を洩らした幾本の梅も惜し氣なく香を散らそれ己れを訪ふ鶯でも待ッてゐることか。　筧に眺めだ氷柱も今は痕なく迎へての故か其水さへ何となく嫩々しく春の色と見せてゐるやう。　流れの草間とうねりうねッて落込む處は即ち池—之は何處かれを形取ッゐのぞとやら。　輕く波をもッて來る柔風の其痕を僅に見せてゐる汀の捨石には…ゐゝ日に背を曝せ小龜さへ三つ四つ。

「いつ來ても飽きませんわ。　お庭の眺めのいゝのに……」

「はゝゝもう度々聞きましたよ……此方をもッと此方へれ出でなさい。　此處かい若草が……まア『三日見ぬ間』ですねエ照子さん…こんなか…ほらこれ菫草…澤山に生へたこと」。

「分けて貰ッたのは去年でしたかね。　あれ弟がいぢッて枯らして仕舞ひましたの」。

「さう。　又上げますよ。　花がしほらしくッて私もはんすき……すみれは横のは……これなに何といふ名あの？」

「はゝゝそれがあの…嫁菜ですよね」。

「嫁菜？　これなの？　ちッとも今日迄知ら無ッたよ。いゝ名ねエ、はゝゝ」

「はゝゝ」

「、、、、、、、、

「相手はないのだねエ」

「だれの？」

「嫁菜の……」

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

「はゝゝ　貴孃のやうよは極ッて居ないとのことでそよ」。

「極らんといふばあなたも如何あの？」

「あたし？　あたしもウ極ッてゐますわ。　誰！　誰ッて松子さん—あなたよ—　あゝあなたでもし無かッたら…はゝゝ」

「誰？　どなた？」

「知りませんよ」。

笑ひさゞめにお餘念のない折も折、池を隔てゝ椿の栽込ゝを左へ取ッた離れは小坐敷—丸窓を明けたのと—見れば松子の兄の良樹、何かは知らず瞬時に變つた照子の顏色、其結搆のいゝ文金の高髷を頂いた頭を下げたは、禮をしたのか但しはせぬのか。　やがて持ッて廻ッたやうに其黑勝ちの目で良樹は顏を偸ゝ見た時には櫻色は頰の笑靨ゐまほれる計りの愛嬌が浮んで居りました。

聞けバ其後照子は良樹の家へ「三つ衣裳」花やかに嫁づいたとやら。胸のときめきは酌交したあの三々九度の盃故と我心に脊く言譯と獨り心の中に繰返したまとでしやう。　日と共に月と并んで、比翼連理の夢いよ〳〵濃やかに、やがて相思二人の中に愛を鍾める兒も出來る。　かやうになッてと各々は信用の念慮も一人深く—云はゞ思ふまゝれ時、滿足してと心と心とれ契り！　愛情を言語に假りて表白するの必要もありません。　之が無言の愛の盛りの夏、目出度此處にも達そることでしやう。　前れ時ハ全く云ひ得ぬ爲先の無言—即ち愛の初春、第一期！　第二期！　獨逸かの學者が借かそんにいひました。

右第二等賞

(ハ)

敬々女史(ケトイロ)

思寝の覺めたらしい娘、頰にかゝる後れ毛かみなでら薄暗い燈の下に机に寄りかゝッて眼を開いたり閉いだり、考へ込んで、誰もゐないのに顔さッと染めてにこ〳〵と笑ひましたがやがて又悲しさうに、物思はしさうに溜息を漏らし、はろりと落ちた涙と甲斐絹のハンケチで拭いて、

「あゝ思ふまい、思ふまいと思ふけれど其思ひのが矢張り迷ひの種だらう。　いッそ見も聞きもせねバ能けれど、はッ今も聞ゆるあの御聲、せめて夜の間も忘れやうと眠れば夢にも馨様の御姿、月を愛でゝさまひての窓開きて、空眺めたまひしけだかさ！　私も庭を歩行いて居ッて、思はず『おや』と顔見合させたと呼バせ玉ひて、それは〳〵御やさしい御言葉！　夢で無ければ何んなにかうれしかッたらう！　私とて淫奔とれふこと知らねでもなけれど、天魔の魅入ッたのか只まひしい。　が、いつも私の足音聞くか否、窓閉なたまふ程のつれなさ！　あゝどうしやう！」

折柄ひさしに鈴の音がしてちよこ〳〵と來たのは馨が寵愛れ猫でした。　意中の人の膝にのつてありしものと思へバか日比娘も可愛がッた者でした故そゞろに懷しく、急いで抱き上げて、

「白やまア寒いのにどこを歩行いてたの？　さうでろ〳〵ッて？」

いッて美しい—思にはやつれたとさすが美しい—頰で白のつめたい鼻を撫でながら、力の入つた語氣、さも熱心に、

「白や！」

よやアおろ〳〵は猫の國では「こい」の意でしやう。

「お前ね！　あのう……持ッてッとくれよ！　ねッ！　いゝかえ？」

文庫から出した巻紙—中には[illegible]の字がありさうな……を縮緬の首玉へ結び付けて、

「さアッ！　ね！」

が急に思ひ返しました。　馨ハ平生品行方正の人であるのに自分が今かゝることをしたら淺ましい轉變と見限られるだらう。

「ちよつ！　ちよつ！」

行きかゝッた猫を抱きしめて、溜息一つ、さも思ひに余つたと云ふ風で、傍にあつる反古に、

藻しはたく胸が思ひをいへばへに
　われぬもつらくいふもはづかし

薄墨に書き流し、思ひきや恐音にべつたり、投出された猫ハびッくり仰天！

評　一旦手紙を送りかけて、躊躇する處ハよく宿情を寫されました。
右二等賞

日本音樂史稿

準綱子

第一部下　歌舞二

田樂

田樂ハ田樂考に榮華物語御着裳卷を引て辨して曰く右の文を案するに 上略 田植にハ必す定りて田樂ハ離れさるものなれハさありし也 云々 田子ハ田うゑ歌うたふ者なる田樂の者の中にもかの歌と諸聲にうたひて舞ふ者あり樂うち笛ふきさゝらつきてかの歌を囃し奏つる者ありされハ田樂とハ名付たるなり後にハ此事一變して田植に有らさる時にも彼のまねをして弄ふ事になりしをも名をも猶ほ田樂と呼び習ハせり 云々 とあれとも此ハ田舞の事にて田樂能の名ハ新猿樂の曲名に見ゆ其の一種が歌舞となりしハ堀河帝の時にあり大江國房の洛陽田樂紀一篇あり曰く永長元年の夏洛陽大に田樂の事あり其起る所を知らす初めて閭里よりして公卿に及ひ高足一足、腰鼓、振鼓、銅鈸子、編木、殖女養女の類 中略 其裝束善盡し美盡し彫るか如く琢か如く錦繡を衣とし金銀を飾りとす 中略 郁芳門院に叡感を催し終文殿の衆各此業を企つ孝言朝臣耆老が身を以て勞挺の戯と勤め折桂射鵠が輩一人を偏せさ隊をなして夜に入れハ院に參りて鼓舞し蓬壺の客も亦一黨となし歩行して院に參る 云々 となる此の高足一足腰鼓振鼓ハ散更の高足一足輪鼓の舞と相似たり之に腰鼓振鼓銅鈸子編木等の音節と加へて更に其節奏をよぎれしくし時人が賞玩を取りたるにて田樂能ハ正しく猿樂能より轉化したるものあると證すへし

鎌倉時代に及んて京に本座の田樂二あり足利時代まて存せり太平記に後醍醐天皇元弘年間洛中に 田樂盛に行ハれ貴賤皆之を玩ふ北條高時之を聞て新座本坐の田樂を鎌倉に呼下し興行せしに程なく北條亡ひ南北の亂となる足利尊氏甚た之を好めり貞和五年十月十一日勸進能など有りて其より應永以後まて京の新坐の田樂猶は盛に有りたり文安元年六月廿九日伏

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

貞常親王住心院に成せられて田樂能は催しありしまと住心院の借實意の記なり其記に據るに本座の田樂菊阿彌先つ編木を舞ひ玉阿彌は笛を吹き花笠高下駄をはく次に立逢をは飯阿愛阿籠阿全阿の四人勤め萬歳の聲を擧け神を飄すると良久し次に刀玉と玉阿今阿の二人にて勤む其役常の儀は一人なり次に能藝十番にて勢田の春敲門の能女佐汰の能小野物狂の能尺八の能鳴子は能書寫の能等と記す其田樂總人數の內に笛小鼓大鼓及ひ狂言の人名なるを見れは田樂は庭上の立藝其樂器は笛皷大鼓にの附屬の狂言なり之を能藝と云ひしあり其記に又云ふ近來新座繁昌し本座零落す今又本座に復して座を興し畢ぬとあり此文にて考ふれは田樂も彪亂刀玉などの舞のみにてはなく附屬の能狂言なると頗る猿樂に似て又樂器も全し是猿樂田樂の同源異流なると證するに足る

斯の如く田樂は猿樂と全源にして堀河帝の頃に起り足利時代より應永文安の頃まで繁盛を極め新座本座の競能ありて貞和五年の頃此時能終て更に新座より新たに猿樂を出したり之より以後は猿樂又た行はれ田樂は衰微して唯毎年春日日光等の神祭の日に少し其藝勤むのみ常には農商を以て業とすと聞え及びぬ

傀儡

傀儡 俗に操ふり人形と云ふ亦は郭禿と書す恐くは風俗通事物紀原書言故事顏氏家訓等の書に見えたれは漢土にても古來より翫ひ來るか和名集に傀儡子＝でくつかひ又たでくいふ共訓せり我國俗に笘出狂坊と云へり南頓子に曰傀儡は木隅の戯れありと注に曰今云人形舞しことは漢土にては周の魏云々又た神道私要には惠美須賀質と号く王れ時に偃師と云ふ者木人を作りて歌舞せしむ是と始とすと事物紀原に見えたり然れ共我朝の始は詳ならず一説に伊弉諾伊弉冊尊より起りしと云へ共信し難し元來此の傀儡は新猿樂の中の曲にして是と操りしもれは攝州西の浦の百太夫なり百太夫西の宮の神前にて神意と慰むる爲め人影と操りしか其事

竟に叡聞に達し百太夫を召して其技を演せしめられ諸藝首の号を賜ひ諸國諸神社にさ兇の勅免有しのは胸に箱を掛け人形と以て神を慰めんと云ふ是れ傀儡の始めなり百太夫は諸國を週り淡路三原郡三條村に終れり後ち某四人百太夫より傀儡を習ひしか是より傀儡傳播せり故に西の宮は其淵源とありたり傀儡は往時定居なくして男は弓馬或は劍を弄し木偶を舞はし或は今の手品遣ひの如き業をなして人目を眩惑せり又女は粉裝して唱歌謠樂を爲したり東國にては美濃三河遠江等の黨を豪貴とす山陽の播州山陰は馬州黨之に次き西海黨は下となす其曲名は十三日、百三十歳、萬戯、小君、孫君等なり又今様、右門様足柄、片下、催馬樂、里鳥子、田歌、神歌、棹歌、辻歌、滿固、風俗、呪師、法師等種々あり

今昔物語に高陽院は親王は極たる物は上手にて細工に巧みにおはしけり京極寺と建給へりしに其寺の前の河原にある田は此寺の領なり然るに天下旱魃しける年此親王長四尺斗りなる童の左右の手に器を捧げて立る形を造り此田の中に立て置け人來て其童の持たる器に水を入れは盛受る時は人形の頸引かゝる様に掛り造りたれは是と見る人毎に水を持來り器に盛り興しけれまゝ京中の人群り市を成しけれは其田燒るとなくして滿稔したりと云ふとなり此等も傀儡の種類にや猶考ふへし

白拍子

白拍子の事は嬉遊笑覽燕石十種遊女考等に載せなり平家物語に抑も朝家に白拍子の始まりける事は昔鳥羽院の御宇に嶋の千歳若前彼等二人が舞出しけるなり始は水干に立烏帽子刀を除かれ水干斗り用ひたり扨てこそ白拍子とは名付けれ云々徒然草に多久資の申けれは通憲入道舞の手の中に興ある事共を選ひて磯 の 禪師と云ける女に教へて舞はせけり白き水干にさうまき(惣卷)をさゝせ烏帽子をひき入たりけれは男舞とそ云ひける禪師か娘靜と云けるか此藝をつぎけり此白拍子の根元なり 云々 此始を嶋千歳若の前と云ひ又た磯は禪師と云ふ

何れか是なるや知らぬ義經記鶴ヶ岡法樂の條に先磯の禪師珍らしからねとも法樂の爲めなれはサハラに鼓を打せつゝスキモノセラツヤト云ふ白拍子を數へてぞ舞たりける心ろも詞も及はれすさしも聞えぬ禪師の舞だにも是れ程に面白し況して靜が名にしおふたる舞なれは左こそ面白からめ云々靜が其日の裝束には白きに袖一重ね綾を上に引き重ねて白き袴ふみしだきりし纏ひたる水干にたけなる髮を高らかに結ひなして此程の歎きに面やせて薄化粧眉細やかにつくりなし唐紅の扇を開き寶殿に向ひて立たり　中略　靜其日は白拍子は多く知りたれ共殊に心に染むものなければしんぜやうの曲と云ふ白拍子の上手なれば心も及はぬ聲色にてしだを擧てぞ歌ひける上下あつと感ずる聲雲に響く計りあり　中略　祐經心なしとや思けん水干の袖をはぜしてせめをぞ打たりける靜君が代を謡ひ事けたれは人是を聽き情なき祐經がな今一節舞はせよかしとぞ申ける云々其裝束の大略は七十一番職人盡歌合、鶴ヶ岡職人盡歌合の繪入などを見は分るへし理齋隨筆に白拍子に付ての珍き話有り當時名高き谷文晁か許へ年齡四十計の比丘尼黑羽二重の袖の下に白無垢を着し從者一人つれたるか來りて文晁に白拍子の舞と畫き給はれと乞ければ文晁曰く白拍子とは靜か鶴ヶ丘の廻廊にて舞る所の畫を望まるゝにやと云ければ尼の云ふには左樣の事には候はす妾ことは昔より此舞を殊の外好にて舞し事の候へば妾か舞へる所を描き給はんと申ける故扨は果して狂人ならめと思ひて文晁又云ひけらく其許には舞を好まるゝことよし聞えれど其舞たまひし事を知れねど筆を取るによしなし一曲舞給はんやと微笑しつゝ云ければ然らば舞候はん坊主あたまの丸きかをかしければ手拭にてかくし候へし扇一本かし給はれとて扇と乞ひて床の間の上面に居直りて扇をは右の脇に置き衣紋かひつくろひ身のかためなどすると見て内の人々も笑を含み袖を口にあてゝ伺ひ居たりしに頓て一曲を唄ひ出したるに其妙音中々申すも愚なりけるとぞ人に始めて狂女にてはなかりけるよと耳をそばだて目をはなたで守り居たるに程なく扇ととりてざつくと立颯と扇を開きたるか扇は十分に開け殊に颯と音立たる扇の音よのつねの人如何によく開きたりともかゝる樣にはならざる趣きこればかりもよき見物なりと感心せさるはなし扨て立上りて唄ひながらに舞かなでしさま扇の手とれひ聲といひ節といひ何れも耳目を驚かさゞるはなし且らくして舞終りける彼の雲の通ひち吹とぢよとよめるが如く今一さしと望まねば無りけり文晁誠に感心して頓に筆を取りて畫き與へしかば謝義として銀を差置住居名とば堅く申さで歸りしとあり思ふに是れは西國九州よりは白拍子の殘れるありと聞けば彼地を領し給へる諸侯の妾なとの年老たる者にや去られ西國の人なるか何れにも有れ白拍子舞の樣子始めて見たりとて人に喜びしとなり

琵琶法師

琵琶法師は新猿樂より出てたり徒然草に後鳥羽院の御時信濃前司行長稽古の譽ありけるか樂府の御論義の番に召して七德舞を二つ忘れたりければ五德冠者と異名附きにけるを心うき事にして學問を捨て遁世したりけるを慈鎭和尚一藝ある者をは下部までも召し置不便にせさせ給ひければ此信濃入道をも扶持し給ひけり此行長入道平家物語と作まて生佛と云ける盲人に敎て語らせけり武士の業は生佛東國の者にて武士に問ひ聞て書せけり彼生佛か生れつきの聲と今の琵琶法師は學ひたるあり（嬉耀子考ふるに平家の節多く台家の聲明に似たる所ありと云ふは行長入道慈鎭和尚に扶持せられ居まし故ならん）又た琵琶法師參院の事は薩戒記に卅二年七月廿七日藏人中務丞源重仲來密談曰近日主上上皇御中不快其故召琵琶法師可聞召平家物語之由自內裡申無先例不可然云由有御返事仝閏六月廿一日己丑天晴依召參院琵琶法師を凡て平家と云ひたり之れ彼の生佛か平家と語る其曲凡て他の物に勝しか故なり

平家物語

平家は既に前述せるか如く琵琶法師の變稱なり當道要略集勘

文錄ふ抑も平家物語ハ本朝四部の合戰狀の內第三なり前後の三部ハ何れも年号を以て題とす保元物語平治物語承久物語是あり　中略　少納言入道信西の孫寛曉法印之御示現有て平家物語の号と給ふ凡夫の類に非るなりと　此ハ長門本平家物語あり平家の字義よ付てハ平家相傳大綱と云へる寫本に詳く記載しありたり　又た此の平家ハ作者に付て種々れ論なり

平家琵琶の最初ハ性撿佛校也　是ハ四條院御宇攝政家道公の御孫ありと云へり（嬉遊笑覽）

四條院の時性佛とて僧なり比叡山撿校なりしか俄かよ盲人となり山王の示現ふ依て平家物語をかたる云々（當道要集）なとの諸説なれ共行長れ作の云ふ說眞に近き者あらん此時の頃よや此平家物語と說經有り後よと折中せる淨瑠璃節と云ふ者流行せり

花おりよしき

第三回

醉廼舍由緣女

暗の夜も吉原ゝのり月夜かあ。巍然たる高樓に天津乙女がひるがへる舞蹈につれて唱歌の聲音色も妙に面白く歌舞の菩薩が色揃是はところも名にしおふ横濱港の遊廓也茶屋の升やハ大一座親睦會の崩れ出し天上天下巳れのミと浮た銚子の三下り謡ふもあり舞ふもあり心もくづるゝ大愉快。かゝる騒きを引もづし大立役者清瀨道行風に吹かるゝ醉醒し、庭と隔て小坐敷に肱を枕の假寐の夢、結ぶ間もなく椽側つたひ、ひゝく足音道行がすかせバ儻に男女の人影忍びて來る樣子にぞ粋を通して出むとそるに一方口の離れ間あれバ詮方あくて傍に身と寄せ、襖の影ふ忍ぶとも知らぬ語らふ女の聲、女「此間手紙をあげましたのよあせきて下さらないの　男「用があつてこられなれと返事をよこしたぢやあいか　女「實にお前さむハ不實ですよ。今更いふハ愚痴ですが、高島町ふ居るときからおまへさんゆゑに浮名がたち此眞金町へ住替したのも皆あお前さん故。厭なお客の機嫌をとつて辛抱して勤めて居るに人の氣も知らあいで澤山浮氣をおしなさいよ　男「いつ己か浮氣をした。おまへこそ程ヶ谷れ大盡に身受をされて行くといふぢやないか。金持の襟にりいて榮曜榮華をするが當世、おれのやうなあ素寒貧は突出すのか藝者れ奥の手、今日ハみんなあの手前もなるし、外に用もあるから其内廢業のお祝旁出直して参ります　女「金さんあんまりでハありませむ。そんな藝者とは憚なから逢ますよ。浮氣家業こそして居ても心まで浮氣ではありません。そりやア隨分色々言ふお客もありますがちやんと心よ錠前御し合鍵ハお前さんに預けて置さちやアありませんか。それよお前さんは邪慳なことはかりいつて人をぢらして惡らしい。私はれ前さんかあんといつても早く負債を返してお前さんの傍へ往き、下女にでもしてもらはうと思つて居るほど其内程か谷の且那か俄ふ身受の相談てそからお前さむを呼て相談しやうと待て居たのに、人をひやかしておいであはるらゟ私は最う覺悟を極て居升　男「さうおこられちや固るよ今のは冗談だよお前を程か谷へやつては私も男がたゝないから、と言て此頃は親父が八釜しいから金は自由にはならない、いくら負債が殘つてるの　藝「みんなでは八拾圓はなります　男「先のやうあら五拾や百の金はどうにでもなるが、はて好工夫りなりさうなものだ何しろ二三日延して置きあ　女「えゝなんとかいつて四五日も延しておきましやうがどうぞお金と拵へて私も一生懸命都合します。寧そ東京へ住替れバ譯もありませ

んがさうそるとお前さんに逢れないから……「東京なら近いから毎日逢れる女「どうしてひとつ土地に居てさへ月に三度とは會へもしないに去るものは日々に疎とし、遠く離れて居るうちお前さん心の替りでもすると……男「なに女の心の變り安いよ。男は物と疑はないからさ。御らんなさい、私といつでも同しやうでもないか。お前のやうに仇つぽくもないよ女「いつ私の仇ッぽい事をしましたいゝ加減にいぢめなさい。死ふらこはくないやうに化て出て喰付てあげますよ男「おまへに喰付かられりや本望だ「あんまり本望でもありますまいと餘所に見る目もをかしいた迄に語らひ合ふも人情の此時二階の混雑も追々引けて銘々目ざす妓樓へ送られて付添藝者幇間か口々に「橋本さんは何處へいらしつた半玉「姉さん〳〵お客さまがお立ですよと呼聲に二人は慌て引別れ素知らぬ顔に表へ出つれバ客「橋本君は何處に居た油斷のならぬさア〳〵行かうと打連てとよかめきながら去にけり道行もはッと一息道行「あゝひどいめになつた。醉を醒さうと思つて醉ッちまつた、蚊にも喰れる出るにも出られず、暑さは暑し、まるでむし風呂へ這入たやうだ。馬鹿々々しい、人にも咄しの出來ないしかし男も橋本金三郎か女は奴のやうだ。金か出來なけれど脱走の。まちがへは死ぬといふ切幕の淨留理あんまり感氣でもない。氷水でも呑なけりや喉が乾いて堪らないと手を鳴せバ勝手に此家の口も八丁手も八町猶六町の達者もの女房「おてるや奥でお手かなるよへーい早く手燭とつゝておいで下女「はいと答て手ランプを持ち、小座敷に來たり、徐に手をつき「お客さまなんの御用でムいます道行「あんまり二階が八釜しいから醉さめにこゝへ來てしまつたが皆な二葉へ行たか下女「へい先程御いでになりましたがあなたのお見えなさらないと騷いでゐらつしやいました。あなたもお送り申しましやうか道行「なに私もこゝのうちで知てる。華魁は買はないからかへる車を言てやつて序に氷一杯おくれ下女「はい立むとするとき互に顔を見合せ道行「おまへはおてるさんぢやないか照「おや清瀬の旦那さまでございます。あの節は誠にありがたう存ました道行「お前こゝへ來るは樣子のあることだらう。何しろ香直しながら聞ましやう。なんぞさういつておくれ照「なにゝ至しましやうか。おかみさんに見つくろつてもらひましやうと團扇を出して前に置き、おやお煙草盆もございません。只今持て參ります道行「ナニ今迄來て居たのだもの照「さやうでございますかとお照の出行後影見送る道行獨言此頃尋ようと思つて居たのに最う廓へ來て居た。しかし娼妓ぢやなし藝者ぢやなし茶屋女とはあの器量には惜いもの。樣子と聞たうへ貰へるなら一番

風變りに學校へやッて勉强させ、成業後に親元を拵らへ嫁にすれバ少しこつちが辛抱するだけ、後は好結果を見るだらう見たところでも色氣がなささうだから敎育次第でどうでもなるいけなきや損として植木屋の苗を培養する積りでやらかして見やうと思案最中氷水を持ち來る酒に添たる二種三種添て持出る其女はお照にならで大年増お鶴といへる下婢なりけり道行は案に相違はしたれどもそらさぬ顔に猪口とりあげつる「旦那さつい御見限でございます道行「わしは遠方へ出張して居たからつる「あなたは華魁をお買なさらないでさッぱりとしてゐらつしやるから女かお嫌かと思へバ粋も通るしれ奥はお仕合つる「油とかけても御祝儀は漸く五拾錢御氣の毒たね「あれたから旦那を迂かりお譽申されません誠に恐れ入ますこと毎度ありがたうございます道行「時に先刻こゝへ來たお照といふ娘は奉公人かつる「なにあれは親類の娘でムいます。おかみさんの身うちでおつかさんがなくしますし、親父さんは戸部で赤いべゝの土播ぎ誠に御可愛さうな子でございます。生れ質か柔和ですからおかみさんが可愛がつて藝をどつさりしこむで藝者にするといひなさるのですが、當人は何か望が外になるといつておかみさんの言事を聞ませむ道行「あれは私も身元を知つて居るが貰ふ譯にもいくまいかつる「外でないあなたことですからおかみさんもいやとは申ますまいが奥さまがお慣りでしやう道行「なにおれも無妻だ女房にするのではないよ。すこし思しくがあつてつる「奥樣に遊はさないでおめかけに道行「どうもそんな懸ぞるバかり回して困る。おまへから内のおかみさんにはなしておくれ。骨とりを澤山あげるつる「よろしうございます出來るやうに咄してあげます道行「又金でもいるやうなら出してあげますつる「なに大したこともありますまい娼妓や藝者とちがひますから道行「何ぶむ頼むよと咄しのうちに照「旦那車かまゐりましたつる「おてるさんおまへはしなはせだよ照「あんです道行「おつるさむ二三日うちに來るから頼むよと表へ出れば下ヶ等「旦那只今は御茶代をありがたう道行「ナニ少し斗、車屋いそんでやつてくれ「有難又お近うちに

第四回

咲初先し梅を赤縁の始よてかざし櫻の色も香も花ですぐ世を浮氣にそねて、氣まゝらしさの枝ぶりも折れてをかしき花はけの水も濁らぬ末かけて、梅と櫻の花心、浦山しは「コロリンチャン」限なき月は小坐敷へ照す二人か影ぼうし「お孃さまよい風ではございませんか。吹はらしで蚊も居りませんと今琴爪をとづし居る。娘はなんの返事もなく空をながめて思はずも溜息ホットつきいだす鐘はいづくか野毛山娘「おや〳〵

もゥ十時だよ。時辰がよく合て居るよと。おつるやまた居眠をするとまた乳母にしかられるよ。お湯を沸してお茶でもおいれ。乳母のおときさも便處より出來るはつみに「はくしやうゝゝと嚔噴の聲におつまは思はぞ嚔噴出せバさすがに乳母も氣の毒と「おやこめむ遊ばせ。つひ癖みなりましてはくしよう「お妻は腹をかゝへは、、、娘は面をそむけ、娘「また乳母が初まつたよ。困るぢやないか。先達て清瀬の伯父さんの前で私は氣の毒であらなかつた時「年をとりますとつひ疎忽と致します。少しらせを引ましてあれから氣をつけます　娘「なみよいけれども人さまの前ではおよしよ。たまには愛嬌でいゝさね。强情な乳母もこれには閉口そるね。は妻の居ねむりは綫にあるよ。妻「お嬢さんは茶の出來ました　娘「おとつさんのお部屋み新甲子のお菓子があるからもつておいで　妻「はい　時「お嬢さまもひとつおことを御聞かせ遊ばせ。只今の歌は俗調ですが中々よく出來てをります。先程も橋本のおよしさんと唱歌を遊ばしましたが私どもにも判りませむからやはり琴や三味せんがきゝなれたせゐかよろしうございます　娘「おまへなんぞにや「ピヤノやヲルガン」の音律は判らないから。さア日本の音樂もあながち捨たものでもないよ俗曲は極高尚な音律だけれど（著者曰ふ日本音樂は西洋音樂に比せバ不活發也然れども音調は高尚あり其優劣相同し）何事も新を好むが人のならひだから　時「さアお菓子もひとつ頂いて久ぶりでお三味線をうかゞひたうございます　娘「お妻もお菓子をとつておあがりはやるせゐか新甲子はなんでもおいしいやうそだよ　妻「どう致しまして物が新うございます　娘「さうだわお妻か乳母御歌ひ今日は土曜日だから勉强はよして爪引をしやう三味線とりて本調子合す音しめも長歌の　○「さア乳母お歌ひよ三味線は音テンチンシヤン　乳母歌「千草結ひみこちやよい雨と赤縁定めて二世かけてうれ嬉しさに長柄の蝶のいもせこそいつか／＼と其日暮しと待に松虫やるせかあうてもしや夢にもきみてうろぎと中に螢のこがれていなおきり／＼そテーントン　妻「乳母さんも好聲ですねエかげで聞くと新造の聲のやうです　時「もうゝいけないほんにお嬢さむの御婚禮近よりました　娘「おとつさんはしきりに道さむの所へやるとおつしやるけれど道さむは此頃は、娘をつれて來て學校へやつてお置なさるとさ。其孃をもこむでから奥樣にするつもりだとおまつか來て咄しました　乳母「なみなの子はおてるといつておまづかひでさアね。なんぼ風雅な清瀬さむでもそむなまとりとはんことななさりやなしません。器量がいゝバかりでなんにも出來やしません此頃おまゐつて思いれいつてやります。大增

氣にいつて入らつしやるさうですからいゝゝたにあつてゐるでせう　娘「道さむも此の間洋行してゝら妻をもらふとおとつさむにおつしやつてさうです。清瀬の伯父さんは妻ともらつて内を極ていけと仰しやつてさうですがそんなかんがへに至らしませうとあいさつもしなさらないさうだから女でもひとつ嫌だらう。私は一生亭主は持ないよ。これから專門になむでもひとつ貫いて獨立するが一番氣樂さ橋本のおよしさむは植産家にあるのおはなし私は音樂と精出してやらうか　時「それもよいお考へですがやはり御ていしゆをお持遊ばして其上でべんきやうさないまし。皆さんか若い間も氣儘で頭のおしてがあくひとりもよいものと思ひますが、人間も天地れあるやうに男女揃つてやることでなければ大事は出來ませむ。旦那も道行さむもなか／＼見止のなる人だから是非あなたと配耦せるといつても仰しやつて入つしやいまそ。さうなれバ丁度一對のよいでふうぬ、私もなんにも存ませんが、昔しもこれでも加賀さまへ奥御右筆に居りましたが奥さまはなか／＼のでかくもんずき、私等にいろ／＼おもなしもありましたが女も男とちがつて何事もこゝ堅まるものだから人情もこまかに思ふことはしとけるが女の性、しかし又水性とて替りやそいも女のことろだとおふせられました。又貞女といふものは一身一行み其人のことおもふて疑るものぞと申まそ。今の開化風からいへば頑固なんでせう。なにも世間も廣いから男は一人ではないし、百人二百人もあるといふこゝろになれも頑固なひとは可笑やうみなりますけれどもどうも目的を定めたらまつすぐに行がよいので、やとり頑固なれが勝であると存ます。學術もいゝかげんに幾つも出來るよりひとつを專門におやりなされるのが宜敷ございます。どふでもこふでも清瀬樣を旦那み遊ばしてそれからなとの考になさいまし　○「おまへはさういつてもなちらでさうはまないから私も道さむの所へまゐる積で。專門學を修めて獨立すると定めて置ゝのたならさきで厭といへバ一生夫は持ぬといふれさ　時「いやといつたらよして外を尋ねていらつしやい馬鹿々しい　娘「今おまへはなむでもひとすぢに思込むたのと貞女といつたぢやないか。先方でなんといつても心をかへず外に氣を散さないのを節操といふのぢやないか。なつちがいやならこちらもいやと外をさがした日には目的か立はしない。是でなければならないと固着しるのを頑固といふのさ。外を尋ねるなら私は心配しやしないの。おやお妻は寐ちまつよ　時「寐るのは壹人前でございますもれ。全くはお嬢さんのおこゝろ引て見ましたのでござゐます。（未完）

文學小言

美と醜

石橋忍月氏は先頃の國會紙上に於て美術世界の序といふ物を載せ、其中の文句に美は醜である、醜中に美いある のは盡中に美の有ると同じだと言はれました。世人の醜と する物も美術家の目よは美である、即ち醜は美であるとは理 窟上言へぬものでも無し、此段に於ては吾々も忍月氏と同意 です。が、併し同意すると同時に、美は醜ぢと言ひ飛ばし た忍月氏の言葉の俗威しには又大に駭きました。政事家か 何かでも言ひさうな言ひ方、一寸見せびらかせて一寸脫ける やうな言ひ方、理窟は兎に角、思へばさて仰山な、堅白同異 の辨を玩んだ古人へは支那人と好一對でそ。

艶魔傳

露伴子の艶魔傳、近刊の棚草紙に出て、近頃の奇文字です の、但し上篇だけしか見ぬ事ゆゑ確とした事は言へませんが 男女相愛は手練手管を書き集めた六韜三略のやうなも 全篇が上篇と同樣の方向のものであるならば、吾々は只一言 露伴子がよく書き集められると許する外更に別に好評を持た ぬれです。是ぐらゐは手練の工合は各種古來の文學に散見 するもの、こゝに一人の丹誠家が有ッて詳らかに刈り集めれ ば艶魔傳その物より猶綿蜜な著述は只出來る事です――男女 間の微妙な現象只これを觀察的に書き綴るといふだけ故。

詩、酒、風流

詩と酒と風流と伴ッた物のやうに考へたのが從前の腐れ詩 人の通弊でした。酒を置かなければ交情暖かならず 乙に風流めかさなければ友信は深くならぬとは扨々歎かはし い沙汰の限り。今の文學者中に此弊風やゝ行それ出しゝと の事、吾々の友人女學雜誌は既に四五回の前に之を酷論しま した。

月　三十首

琴水女史

霞とは誰が僞ぞ白妙の花よくもらぬ春の夜の月
月影はよこともも見えず霞む夜に木の下闇そ獨り明行
霞行く影さへ嬉し小夜風にさえし扉を月に開きて
余波われや待出し方に影寫る花の梢の月のあけはの
月の波霞洗るはども浦波に見えてさやけきやまれ漁火
里までもさしも送らぬ影あれや卯の花山のかへるさの門き
夏の日を詠めくらして見ぬもあらぬ見もせぬ影や短夜の月
須磨明石すむらむ影もみるめなき我身を浦の浪の上の月
漁いづる今一際のさやけさに雲こそ月の光とはみれ
もれいでん雲間またれて中ぞらに行も惜ぬ夜半の月影
つく〲と月にむかひて思ふ哉見ぬ世の事も語る斗りに
今日はまた待やともなし庭に出で立やすらへばいづるつき影
よしや見よ此の雨空の晴ぬとも今夜の月の名やはうくれん
聲よなる山かとはかり時雨なし後しも白き在明のつき
漁火も更行く浪に影さえて月のみ白き秋の浦風
月そすむ千年の秋も池水の庭のさゞれの數に見えつゝ
不二の根はなべての峯の雲霧も麓よなして月やすむらむ
更科の秋も今宵とまたはしよ都の峯の都きも名高し
嶺に生ふる松そ久しき秋のつきんあればやまの霧にこもりて
置あへぬ露もさながら月かげお分し跡ある野邊の通ひぢ
むさしのや草の葉分お見えそめて露より下よいづる月影
澄のぼる月の桂の棹さして明るもしらぬ秋の舟人
更わたる月や誘ひて澄のぼる川音高き夜半の靜さ
やそらぐる光や同じ浪間より影あらはるゝ住江のつき
名にしおふ今宵一夜にと斗りも見しれる月の影をしそ思ふ
暫し尙曇ると見しぞ光なる時雨の空にもるゝ月かげ
妻戀をなくさめかねてをはば捨の山ならぬつきよ鹿やなくらん
人もかく送くらましかは皈るさの月は身にそふ今朝の別を
諸共に見しよの月の光まで面かはりそる人の秋はうし
斯かる夜の月に夢見る人はうしと云はぬ斗りの寐の寤哉

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時感二十首　　千葉埴麿(チバ)

ひるよるに人のゆくなる敷島のミちに迷へるもれもありけり
やすく〱と安らのくふゝみとよせて月雪花をめつるうれしさ
きのふとも今日はあたなりあすかゞは流れ變はれる人の心は
むらきもの心にかねてちかひしはあた國人の手ふりまねしと
なにことも随ならぬこそうき草のうきよの常と思ひそめにけれ
そめくよの榮えはおのかさかえ也るゝせにすな世の中の人
よのひとの上にたちなとおこらすにとのはしにも敬みなまし
ミのすゑと國のゆくへを思はすれかくれ思ひを焦さゝらまし
ことちとふ國とはたゞのなのミにて思ふ思ひの言とふれぬ也
しきしまの倭しまねのほそミちもことのはしげく成にける哉
ひたふるに御くにとしふるくあたふれ我敷島のミちを踏みよ
よを厭ふ身にはあれ共しかすかに國を思はぬよはさへそなき
ものゝねに樂き聲は何あるやおとりまひするときならなくに
あさかほの花よりまたきうつろひてたのみ難きは人の言の葉
きのふまて過きこし方をみわたせはいはらもおへし小道也鳬
よのひとも斯くそありたき冬の松なやみていとゝ色増りつゝ
こよひとも知れぬ命をもてはこそあさ夕神にまいれるなりけれ
ちはやふる神のみかせを今更あふかすそ人のまことありけれ
されてしも倭とのこそことさへぐからの手振になに靡くめや
なつさもミ引れもりへらてやの如くすれもくものは月日也鳬

寄書

三たび鹽澤の君へ　　三阪きぬ(サカヒ)

伊勢のまゝ子様から「味方打として何とそる」との嘲嘘文字、既に之を見る身の此處に彼是議論も出來ぬ話し、然し妾は妾の胸に立塞ッた疑を質したれです、固より禮に嫻はぬ妾それ故文が疑を質したのと思はせ得ませんでしたらう、我作ら氣付かぬでもありませんでした、で七十二号拙文の末で序なから「家内から火を出すやうな嫌ひがあるとのことで御座いますれバ無論沒書して下さるが本志」と敬愛してゐる成美社れ記者樣へ申上げた位でも、が御掲載に預ッての御手數、之が爲に我疑惑も雲消霧散して淺薄な智識も比較して増加することゝ思ひ居りました、が其後御答辨は既に二回つの御襲称を煩はしました、それでも尚―あゝ我身を恨みます―腑に落ちぬ箇所が有るのでそ、腑に落ちぬ箇所之と腑に落ちたとして默そるれも心に對しても恥しい次第、後來我と我身を恨む機會の減じる事情ではありませんから敢て漆濃いやうなから尚申上げます

此度は意見の違ッた箇所を項目分けとして下さいました妾も逐次それについて申上げましやう固より筆の行くまゝ、錯雜不順序なことでしやう、改めて「私の論の骨髓は……」との御聞りせ、之は仰せ迄もなく「文章をきめるについても言文一致か私の主義」との御言葉で先刻承知致して居りました、承知いたして居ればこそ尊嚴を冒す罪も顧ミせ重ね〳〵御尋ね申上げたのです

(一)文章は一定しないのも文學は一定しないのであるといふても差支ない位

文章と文學との文字に對して一般は人が持たせてゐる意味は果して如何でしやうか、共用に一定などの文字を下され得られることか得られぬことか、別段の思考も要せぬこと然し特別に御下しになッたことゝは如何…と伺ひもせず述へたのが抑の誤りでした　誤りは謝しもします　が後進の妾等が此語に對して疑惑を起しゝのは果して無理か無理で無いか、扨此孰れでしやう?、七十六号での御解釋は即ち下記の通り「此語と使ッた私の底意は其文章が亂れてゐては文學に種類があるやうな細かに云へバ文學に何流義であらうと其書く所の文章は一定せられたい亂れてゐるから文學の性質が分らぬやうな心地もそるとの意味」―之でした、はゝ底意!　底意として發揮せられた重要文字中の其種類とか性質とかは一体何と御指!なされたのですか?　全一意を寄せられた文字は全然異意義ものゝ異意義の文字に全一の意を表明さすことれ出來るとは扨も新現象、然し七十九号で「前二條共に文學をいふ字は上へ日本とか西洋とかの冠詞を被らすのを迂濶に忘れたのだ」とのことでした、が冠詞と被らせて廣大な文學の意味を若干量削減しゝ迚それが爲に妾の疑問は消滅しません、あゝ定めて是も一種特別の意味を含ませになッてのことででしやう?　其同七十九号で又「私の意見は文章が一定しないではヂッケンス派はヂッケンスカーライル派はカーライル又西鶴派は西鶴其碩派は其碩……と井然と窺ひ悉いといふやうなつもり」との仰でした是が眞正の底意の底意?あらバ初先て分りました、文學の種類とか性質とかは文章の流派ー流派であッたことが、言葉を反面から解それバ「文章が一定すればヂッケンス派はヂッケンスカーライル派はカーライル西鶴派は西鶴其碩派は其碩と井然と分る」此やうになりまーすが座を改めて尋ねするが迄も無く果してさうでしやう、あゝ此流派の明白に分るれが「文章の一定しないのは文學の一定しないのであると云ふても差支ない位」との言葉を極めて明詳に解れなされた其解釋と見受け申すとは!　誠に案外でしゝ

(一)今日世間にある言文一致ハ二三名家を除く外見るに見られない

二三名家を除く外言文一致の文ハ見るに見られ無いとは何處から見ての御話しか？　比較に依ッて云ッたる語だとハ承りましたが、博通の上に比較を御立てなされる丈の御眼識を御所持の御身！　事情が許せバ覩しうる御目もじの下に御教授も受けたいです　なゝ言文一致の氣運狀態ハ今正に慷慨文字に依ッて奨勵を假るべき時?!　御言葉に感奮興起する人も定めて世には數多く有ることでしやう、何にせよ幸に智識理想共に豊富殊に氣慨ある御身が御同志だとは、なゝ言文一致の將來も頼母しいとの感じを一層に深くしましたと茲に更に謹んで申上げます、殊に末尾に御用ゐの御言葉、修辭學上に謂ぬ言語の樣色では隱語といぬのか諷刺といふのか面白い御手際「私は實に不文で……」などゝの御謙遜て誰が信用を置きましやうか

(二)如何に不束な語で書いてもそれはいけんといふことが出來ない

佶屈難澁な彼の漢文を直譯してそれが「です」「でしやう」に語法を假ッたならバ早それで言文一致は成上ッてゐると思召ますかと御尋ね致しましたが「それは無論言文一致でない」とのこと　妾ハ御說に思ふと矢張言文一致といへるもののやうに思ッてゐましゝ　從ふも因緣のあること實に表題の語からです　なゝ好論家の言のやうに聞へるのは果して誰か、然し言文一致でないとのこと先づ以て大慶です、扨此處で御伺ひしますが前述のもの即ち漢文が語法をですでしやうに假ッゝものがいけんといへるのは何に依ッてゞすか？　言文一致でないとハ何處から御觀察を御下しに依ッてのことですか？　其御標準を御打明け下さいませんか、殊に「御座んせん」「御座いません」「御座りません」いろ〳〵なる私ハ關東者」、それ故御座んせんと書きたいが御座れませんと書くとのなど、愈不思議です、何故態々筆と御拄げてすか　御說の言文一致でハ前孰れと書いても己るいといへぬとの御意見とハ逢ふのですか、固より御新案の一大家の御腕前―の御闘解に依るまでもなく言語といふ範園と言文一致と云ふ文章の制定ときッかりしてハゐませんが智識に入ッた普通の語ハ一筆と柱げて迄御隨ひなさるのを見れバ矢張御認識！　それとも亦逢ひますか　注意とかの禁條とか云ッたのハ實此處から出るのでも、此注意も禁條も打拾てゝ擠はぬもの迄―もしあらバ困ッたものとハ誰とて認めましやう然し―矢張いけんといぬことがまア出來んとハ！

「難いときッかりそれを証據立でる

ものがあるか」「言文一致の標準ハないだらう」、なゝ其文章の毫厘の疵瑕も現はれ又世に標準と一般に見られる器械？の出來上るのハ此不動でない世の果していつか？　一世期？　二世期？　遂にあの無い黃金世界？　なゝ御目論見の？ものが出來上ッた曉がそれが完然な己るいと証據立てられ併せて圓滿な標準のある時でしやう　此成り上る時を何時かと考へて扨分りました言文一致の文は、どんな不束な語で書いてもいけんといふことが出來ないのが、御說では言文一致に御限りのやう、然し是ハ固より文体を撰ばぬことでしやう、全体に行渡る異理！　其一部分の言文一致ハ―も、實に今標準とするものもなく！　惡いとも云へぬもの！　「見るに見られ無い」なぞ、ハ―忘れましたが妾が―申しゝのか知れません　いや是い矢張り間違なく御口から出た御言葉　貴問に應じて云ッた「基礎の言語ハ荒增し指定されてゐる」との箇處ハ御取除けで「固より極ッてハゐません」との言葉」丈に基礎を据えて「だうら……」と表題の語と以て御結論なさいましたれを七十九号でも拜見しました、然し最早述立てなさいませんの胸此御結論の御手際　議論必勝の秘訣是も近頃御發明の論理の一新法と御示しを有難く存じました

次に日本語としてよいかわるいか分らぬのがあるとの語ハ「全意味異音の語二つ以上あるとすれバ其一若くハ數を指した」のてのる」との御說明、態々御問合せを頻にしまして先々回な妾です一使ッた洋語なせハ日本語として合ないのでしか己るれは……」一、御說明ハ簡單でまだ全化の度合ないのでしての御意見かも一つ分り兼ねます「いよ〳〵使ハんければならんのは……」とハ承ッてゐますが大層な御尤めを棄むッた身ハそれも詳しう承りたいです、妾ハ固々必要と認めてれ上に使ッたもの、其所業が正しく先に「吾言文一致が見るに見られない一切の原因だ」と仰ャいました！　之ハ書物編纂についての話しでハなりません此眼前の事實に對してゞす　如何？、むしろ外國語ハ一切用ゐぬとのことであッたれバ……―滅多に御出しでない　意見で此く申すのハ失禮の限りですが―とハ今更自分の了解し易い点計りから浮び出した思想、之でも妾の智識の階段が今何處に在るといふのが分りましやう、尙「ぶが然し」以下の御尋ね申したについての御解釋、何も妾ハ「論理にあて嵌めたならは」と仰ャつた丈で分りませんといふたのとハ違ふて　其數行の總てありいてゞす、然し御解釋で了解しました　御身と妾とハ據とした基礎に正負の違ひがあッゝたのです　然！　基礎ハ其何れに置くがなゝ理の正しきを得てゐることでしやうか

(四)一大語典を編ミたい

此條についての妾れ筆法には始んど腦髓と攪き亂された!のあと、筆法も墨法も何も無い拙劣極まッた文章是非がないことゝハ云へ恐多い次第です　つら〳〵今思へバ妾ハ實に當初の御文ょ對して一々信用と字句の間に置き過ぎました　反對やうな意見も出たれハ實此處からです　其「出來やう筈もあし」と申したのハ見た處出來やう筈があいと思へバこそ、今回「其基礎ハ?」との御尋ねを受けました、御答へ申しましやうが先だッて當時の御文お對そる實際の觀念を敍述するのが必要です、其斷定の言語となッたのハ此觀念が現はれたのですゐゝ　で事長くもなりましやうが御覽下さいませ、六十九号當初の御文ハ「日本の文章もかうと思ふと容易であい之ハな世かうだらうと云ふと言語を一定しないからでだいや言語を一定にしやうとするのでハ無い言語を取調べて其言語で文章を書ゐないから一定しあいです」實にかう―一字も敢て増減せぬ處でそ、此御文で言語一定と―正意で無いにもせよ―字を疊まれて必要は何?之さへ疑惑の一材料とならなくもゐりません、殊お「其言語で文章を書く」其とハ何でそ?何を指示して居ましやうか?　云ふ迄もなく取調べたもの即ち字書に乘ッたもの　其乘ッた言語で無ければ―文章一定を希ふものハ―其外ょ書けぬとハ反面に解し得られぬでしやうり　文章の一定するのハ其字書の言語で書くから（之につれての意見ハ妾ハ逃へません）とハ正しく是御身の御意見!さ!此處が即毫末千里の分れの立場、今更れやうょ申上げるのハ妾の如くハ解し得らどるか解し得られるか此二つの疑問です、無論解し得ゝれぬものあら妾ハ七十二号で自然陶汰などゝ新し顏ょ進化說を引出しハしません、妾ハさう解しざのでも解して扱自然に背いた制限!他ハ使へぬあどゝハても神聖奇怪孫悟空どころの話しでゐらうの?　わゝ之が出來やう笞もなしといッた基礎!　是非御諭しをとの御言葉に敢て申上げるのハ即ち是です、妾のやうに見た眼れどう文學進歩に益ゐるものゞといひ得ましやうか　地を易へても御覽下さい秩序を與へるものだとハ見られまそか　此字書が七十七号で―誤りハ失策であいれか―「先に字典とかいたのハ實際誤りでゆく失策で語典の意だ」と御述べになッて　更に七十九号で「其言語の範圍内で書けといふ命令ハ下さぬ其語典を只標準にせよ―それも經驗をつんで完全なものとなッた後」とのことでゝ　なゝ論旨ハどの箇處も定めて前から確乎不拔少しも移動せぬのでしやう!　それに何故妾ハ得見ませんでしたらう?　「から考へて見ると日本の言語を取調べて一の大字書とあそれがいゝ量見日本語ハ正しいものゝゐるつ丈古語や漢語洋語の使はんでもすむだけを調べていよ〳〵使ゑんけれバあらんのは矢張りこれと日本語とする」とハ前につゝけて仰ッた御言葉　之を定らはぬ妾に推察で語典―語典ぶと御見まとハ!　背くも語典のつもり!―詳しくハ普通の字書と御目論見の語典との違ひとまだ承りハしませんが―一語の前文法の点に御論及あかッたのハ抑何故でそ?　一方でハ「吾邦と交渉尤も甚しい國れハ調べなければあらんが其他ハ略しても差支なん・又もし語典に與らない國の語と差合が出來た節にハ可成譯して譯せあいれハ原語をか々バよろしん」とまで仰ッたよ!「云ふた七十六号語典編纂の六功用中に」如何よも仰ャいました然し六十九号でハ何處ですか?　字書と語典とハいかにも違ぬとハ御口からも出た御言葉　妾ハ先のを字書と見後のを―そきも御言葉で語典だと見たのが抑惡いのですか　惡いとハ仰ャいもあさいませんが「どうして別問題と御判定?」との御尋ねハ更々分りません　此處妾ハ改めて「語典編纂に關する意見とでも御命名の上平易あ文章に明詳な御意見を御開ゐせの程願ひ上ます　ゐゝ思へと言語文字!　之で云へ之で書けと云ッたッて土臺から其性質が許さねもの　此道理は能く存じて居り乍ら此道理に重きを寄せず　御文の字句に一々信用を置いて重く見たそれが疑惑の元の起り　詮むる迄もなく我身の淺はかな心からでそ　淺はか!　然し乍ら御目論見が普通の字書であると見れば既に古人が編んだ和名抄新撰字鏡節用集伊呂波字類抄其他和爾雅といひ名物六帖といひ尚近頃の出版書にも物集氏のやら高橋氏のやら大槻氏のやら數多くあること　どうして出來んと―普通のものなら―申しましやうの之でも御推察の御下しを玉はらなんゝとれ

……………………

(五)新字とおしらへたれ

「新字についてハ幾らか意見があいでもなんが」との仰せ、心意正當の作用として拜見の榮譽に遭遇したれとの念慮が一人勝りもしました　六十九号の御文一篇それさへ腦髓を御絞りょあッて出來たものたとのあと　御考案も定めて……一日も早く御身が文學世界に御公開の上創造の名譽を御荷ひにあるのを待ちます、餘光を拜して數ならぬ妾等も喜ぶあとがありましやう

書き終ッて筆を擱くと同時初めに云ッたにも似ず御尋ね申しゝ要領ハ既ょ腑ょ落ちたやう　殊につら〳〵考へて實に御身ょ對し併せて諸孃へ對しての失禮を自らも驚く計り思ひ付きました　殿達の身それ乍ら妾が爲に失言で

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なッたとか恐るヮッナとの果はまことと相すまぬき迄の御挨拶　如何に我利益にあることゝて云へ罪深い至り在天の神も御照覧も空恐しいやうです　で此處此一篇より對して御答辨を玉はると玉はらぬとに拘はらず妾は是限り！此事に關する筆を斷ッて更に御質疑は申しません　從ッて御尋ねのことが有らう共敢て御答へ申す義務を欠きますからあしからず思召し下さいますやう　改めて誠に御親切な御教授に預ッたのを謝し置きます　末筆ながら金玉の紙片を詰らぬ文字で詰めて永々御目を汚した段は幾重にも之を大方の親愛な諸孃達に御詫申上ます　三坂孃の言葉は兎に角言文一致論もあまり長くありました故記者もまゝで不肖ながら敢て仲裁といたし升。盛澤氏にも何とぞ宜しく。併せて各位が此道に御熱心な段いくへにも御禮を申します…………いらつめ記者

通信問答

●まゝ子――(一)ならずとは「然らぬ」は義です(二)あら有難やの「ァラ」と「ァ、ラ」と長く引くのは只感情を強める丈の事です(三)莫連も街妻、いづれも悪心の婦人との義です。但し莫連の方には街妻より猶一層不品行の意が有ります(四)曲山人の俗稱は忘れました。

●山本ふさ――(一)西洋で發行する婦人雜誌は大抵みな文學思想を持ッた物です(二)外國へ爲替を振出す時にはよく〳〵其時の爲替相塲の高低をあらかじめ呑み込まぬと非常な損をする物です。爲替相塲のあがッた時に振り出せば少額の金子でも多額の物が買へます(三)秋水櫻氏の本名は御存じと思ッて答へません。

●TN――(一)元服して婦人が齒を染め、眉を落すのは野蠻の遺風です。眉だゞ落し、齒を染めず、或は齒を染めて眉を落さぬ、是等は何れも半元服といふもので、新舊二樣の折衷です。何れも餘り望ましく無い事です。一番は、眉も落さず、齒も染めず、天眞の儘にする事です(二)嵯峨の屋氏の「初戀」は都の花第六號に出て居ました(三)夏木立の前編は武藏野の外に四五種の小品文が載ッて居ます。一冊卅錢。但し後編は美妙齋主人の作では有りません(四)「玉藻」は殘花氏の作、「知盛卿」は雲峯子の作です。

●牡丹――腋臭は左の法で治ります。　氷揚酸一匁、澱粉八匁、ラヘンダ油二十滴をよく交せ合はせ、最初清水一合に明礬五分を溶かし其水で腋の下を洗ひ、柔い奇麗な布でよく拭ひ取り、それからして前の合劑をすりつくるのです。

●ゑる子――綿物値段（前號のつゞき）――扨一寸御斷りして置きますが左に記したのは皆一反の價です。

	圓　錢
本南部織	一七、六九〇
綾糸織	五、三六四
全前掛地	一、二五〇
綿入湖羽織地	〇、六九七
新紬	一、三四五
綿紡績織	〇、九二三
全前掛地	〇、六七〇
手織紬	〇、四九七
覩光縮緬小巾	一、〇三九
全更紗	〇、八〇〇
覩光朱子九寸	一、九六八
糸入摸様玉川	〇、九四二
糸入瓦斯二子	四、一一五
絹立瓦斯糸織	一、三八一
節糸織	二、四六四
紡績織	一、六〇八
東小伯男帶	〇、六五一
紅梅織	〇、六〇八
麻苧織	一、一六三
繻子地大巾	一、六五八
紅栗紬	二、五六七
小倉男帶	〇、三七四
全八寸	〇、三一六
全馬乘袴	〇、六七一
全八端織	〇、二九〇
二子織	〇、四九四
全前掛地	〇、六二七
綿琉球	〇、二八一
無糸木綿縮	〇、六二九
全交飛白	〇、四五四
全廣巾	〇、四六三
チル縮	〇、四四〇
紺飛白	〇、九七二
和合飛白	〇、五四二
楊柳織	〇、四六七

	圓　錢
糸織	三、九二八
綿南部	一、一七二
綿上布	〇、八八三
全前掛地	一、四九五
綿八丈	〇、四五一
綿太織	〇、六五七
綿紬	〇、五三五
新琉球	〇、三六七
全友仙板〆	〇、八五二
全襟地	〇、〇五九
糸入木綿縮	一、三九〇
竹縮	〇、九一八
博多結城	一、一二六
全八端八寸	一、〇五一
本八丈	二、八一八
全男帶	一、一七八
全女帶九寸	〇、五二六
綿繻子	〇、八五四
東小伯八寸	〇、三四二
糸入綾千鳥	〇、七〇〇
漣織	〇、五四五
全女帶九寸	〇、四六四
全七寸	〇、二六七
全平袴	〇、五九六
瓦斯二子織	〇、九〇二
京織	〇、三四九
結城縞	〇、五七三
綿手縞	〇、四八四
全白縞	〇、四四三
全白無地	〇、二九二
阿波縮納戸地	〇、四一三
雲井織	〇、五五七
綿ハンカチーフ	〇、五八一
平白縞	〇、三一二
綿玉川	〇、三六七

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學書類發行　　女學雜誌編輯

家庭廉價　子供の談

紙數八十葉　郵税なし　定價十二錢

右ハ子供の爲になる好きお話よて、母親が言ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舍音樂師。第二、菫の君、第三、熊と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〳〵とタバイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔順なる娘。第十、英雄の所業。第十一、まましき兄妹。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議れ新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も惡き所行。第十八、正直なる小娘。

西洋女禮

紙數六十七葉　郵税なし　定價十二錢

右は、婦人紹介の事。婦人書面紹介れ事。婦人訪問名刺の事。婦人會話の事。婦人案内れ事。散歩、かざり、宴會の事。食卓上の心得の事。婚姻の事。客と遇する事なぞに分ち、西洋貴婦人の心得と一と通り平易に解明したり。

女子生理

紙數百九十葉　郵税なし　定價廿五錢

右ハ、月經の事。懷娠れ事。分娩の事。の三門に分ちて、くはしく女の生理れ事を說き。且つ長谷川泰氏が婦人病の元因、村岡範爲馳氏が眼鏡の話と云へる二つの論と附錄としたるもの也。

和畫案内

紙數百廿葉　郵税なし　定價五錢

右は八木兼辰氏の講述よらへるものなり

兒育て草

紙數百六十葉　郵税なし　定價二十錢

右は育兒の心得を問答躰にして、人の氣のつかぬ細かなる事迄て一々說明し、母として子を育つる總てれ心得と悉とく講述したり。

邦文學

紙數百六十葉　郵税なし　定價二十錢

右は同志社敎師松山高吉君が講述にして、和文躰の文法、語格と、極めて細密に說明しゐるもの也。

女學雜誌大安賣

第百號より、第二百號に至る迄、欠號なく揃ひ居るもの多少有之候、百卷をば僅よ貳圓五拾錢よて前例の如く賣拂ま、其后欠號を生ぜる分金壹圓の割にて相そろへ賣捌可申候但何八十册にて一と通りづゝ買入を要する義にて其內撰び取りハ斷り候、右百號より二百號に至る間にハ、出版の當時世を驚かしたる「日本の家族」。「浮雲の細評」。「理想佳人」。「理想紳士」。「家內經濟の大要」。「男女交際論」。「經濟雜誌記者との論戰」。「島田三郎氏米國よりの女界通信幾多」。「無名の英雄」。「戸內の戰死」。大鳥圭介氏、德富猪一郎氏、田口卯吉氏、光明寺三郎氏等の女子敎育論。月の舍しのぶ氏が「哲女の卷」。「將來の和歌」。「將來の日本人民」。森有禮氏の「妻妾論」。「櫻花爛熳」。「滿目漠々」饗庭篁村氏が最秀の自作小說とする「昔の夢」。「此大沙漠界一人の詩人あれよ」。「給斎に於ける國粹保存主義」。「犧牲献身」。「詩人」。若松しづ子が「忘れ形見」。等の極めて面白き甚ご益なるものを含めり。

第三版

百人一首講義

上製美本　五十錢　郵税六錢
並製淡裝　三十五錢　同　四錢

正月の稽古に宜し　遣物よ宜し
歌留多遊びに宜し　詠歌よ宜し

女學雜誌社

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

通信女學新 第二期生 募集廣告

學問隆盛の今日、女學の進歩一と方ならぞ、凡そ年頃の娘君よして舊發學に就らぬは最とく少あく、既に一家の妻とありし方よても晩學の勉强をさく年少の人よ劣らぬも多し、慨して何處の婦女子も皆な學問と云ふとに心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬると明治の代れ恩澤にて有がたきとと云ふべし、因りて何處よも女學校の設けあり何處の娘君も玆に入學して日々の進歩目覺しきとなるが、既よ妻とあり母とありて一家子女の掛念ある方々とも甚はだ手數なれば今日の時世よ斯る御婦人のみ此儘無學よ最早家を出で通學するとも出來ず又家よ敎師を引て敎を受る終るべきかと心配する人も少なからぞ、此類の御婦人と何か家に在りて獨り稽古そる工夫なきか又獨學に便利の書物とあきかと屢バ問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨年一月通信女學の仕組を新設し、毎月一冊の講義錄を出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びそるの便に供へたるが、本年一月に至り、一ヶ年の課業と恙かあく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの七百餘名なり。然るに、去年一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第二回の習讀者を募る。

敎授科目左の如し。

萬國史、日本歷史、算術、簿記、理化學、生理學、動植物學、作文法文例、料理、歌詠方、女禮、和文讀本、漢文讀本、家政學、（衛生、育兒、看病を合す）裁縫、圖入地理、英學。

敎師は、醫學士三島通頁、農學士寺尾熊三、磯貝由太郎、鈴木弘恭、其他重もに明治女學校の敎員諸君に委賴し、專ら親切鄭寧を主意とす。

代價一冊前金三十二錢（無郵稅）、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れバ發送せぞ。

明治二十四年一月廿五日第一號と發兌し、以後毎月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目とあし、其十二月ニ至りて全科卒業となそ。

東京麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

少年園とこども

今日幾百千の雜誌中、眞に少年敎育よ裨益あることと『少年園』の如きもれあらざるべし。其少年園よ於てハ少年の一生に關する心得を諭し、其學園に於てハ百科の學藝に就て毎號博士學士の卓說を揭げ、文園にハ古今人の模範とすべき和漢文を錄して紙上に花を飾り、譚園にハ笑ふべく泣くべく驚くべき奇談珍說快說を集め、其他叢園ニ芳園に千紫万紅の眺めを添へ、一として人目を娛ましむるにあらざるはなし。されば少年の讀むべきハ言ふまでもなし、敎育れ任に當る人ハ、參考の材料として座右に缺くべからざる雜誌あり、敎育の任に當る江湖の君子、請ふ試に一讀せよ。

毎月二回發行。三月三日第五十七號發兌。定價金五錢。十二冊（半年）前金五拾五錢。廿四冊（一年）前金壹圓。郵稅一冊五厘。爲替拂渡局本鄉郵便局。

『こども』は愛らしき子供雜誌なり、其記事皆極めて平易よして尋常小學生の能く讀み善く解そべきことのみなり、敎育者課業の餘よ之と生徒に讀ましむれバ、則ち喜で書と讀むの習慣を來さむしべし、此中にハ毎號最も面白き一ッ話多し、課業の餘若くは修身敎授の爲めに生徒に語り聞かす種子よとも此上なりるべし。

毎月一回發行。三月廿日第十三號出版。定價金三錢。十冊前金二拾七錢。廿冊前金五拾錢。郵稅一冊五厘。見本一冊郵劵四錢

發行所 東京府下北豐島郡上駒込村十九番地山縣悌三郎邸內 少年園

毎月一回 知玉叢誌

二月廿日第四十四號目錄汝といふ語の源●辛卯第二會雜話●天保六年八月老人の咄●ぞめき●牛門瑣言第五●俳事談●從好劄記（續）●いろは短句補遺●流行感冒●俳道の秘密●ウンデレガンと云ふ語●詩歌俳句●見本ハ五錢劵にて呈す●寄書優等者へハ授賞

橫濱太田町 知玉學會

（遞信省認可）

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY